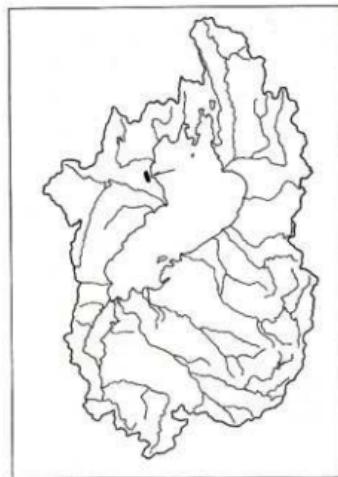


国道161号線バイパス関連遺跡調査概要(昭和59年度)5

高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要

—正伝寺南遺跡・針江南遺跡・針江北遺跡—



1985

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

はしがき

昭和57年度より、新旭町の平野部を縦断する国道161号線高島バイパス建設に伴う発掘調査を開始しましたが、今年度は南より順に正伝寺南遺跡、針江南遺跡、針江北遺跡の3遺跡を対象に調査を実施しました。その結果、先人の残した貴重な生活の軌跡を記録することができました。発掘調査の正報告は後日刊行する予定ですが、とりあえず、本年度の発掘調査の経緯と、調査成果の概要を報告したいと思います。本書が、湖西地方の歴史を考えるための一助となりますとともに、現在を生きる私たちの指針ともなれば幸いです。

なお最後に、調査に御協力いただきました関係者、地元新旭町、同町教育委員会の各位に感謝いたします。

昭和60年3月

滋賀県教育委員会事務局
文化財保護課長

市 原 浩

例　　言

1. 本書は、建設省の実施する国道161号線バイパス工事に伴う、高島郡新旭町所在正伝寺南遺跡・針江南遺跡・針江北遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、「一般国道161号線（高島バイパス）新旭町内遺跡発掘調査」として建設省からの委託（69,161,000円）を滋賀県が受け、財団法人滋賀県文化財保護協会に再委託して実施した。
3. 本事業の事務局は、以下によって構成した。滋賀県教育委員会文化部文化財保護課課長市原浩、同課長補佐松浦光彦、同係長丸山竜平、同管理係主事小谷清、財団法人滋賀県文化財保護協会事務局長江波弥太郎、同主事松本暢弘、立入裕子。
4. 調査は、滋賀県文化財保護協会調査課課長林博道、同技師吉谷芳幸、同技師清水尚、同嘱託尾崎好則を担当者として実施した。
5. 調査期間は、正伝寺南遺跡が昭和59年5月21日より12月27日まで、針江南遺跡が6月21日より9月19日まで、針江北遺跡が6月4日より12月25日まで発掘調査を実施し、それ以降、昭和60年3月まで整理作業を実施した。
6. 調査にあたっては、新旭町役場、新旭町教育委員会ならびに同委員会主事岡司高志氏、同嘱託長井秀之氏から格別の配慮を賜った。記してお礼を申しあげたい。
7. 調査・整理にあたっては、以下の諸氏の参加と協力を得た。
服部喜和子、森下直子（調査員）、斎藤博史、井上誠、南淳一、奥野美香（追手門学院大学）、遠藤千尋、加藤重子、三塚志穂、河井美恵子、西貝祥子、八田麻紀（橘女子大学）、赤嶺浩二、安藤修、下田順一、宮田安志（奈良大学）、森本敦子（佛教大学O B）、横田康之（奈良大学O B）、林　要（金沢大学）、浅見千春、神田恵子、寿福滋（主任調査員・写真）。特に森下直子、斎藤博史、神田恵子の三氏には格別の御尽力を頂いた。記して感謝を申しあげたい。
8. 本書は第1章を清水尚、斎藤博史、第2章を尾崎好則、第3章を吉谷芳幸、森下直子が執筆し、全員の討議を経て編集した。なお、附章として、滋賀県文化財保護協会理事の西田弘氏に石劍についての資料紹介をお願いした。記してお礼を申しあげたい。
9. 図面作成、整図、写真撮影は調査者全員があたり、針江南遺跡の遺物撮影は寿福滋が行った。

目 次

はしがき

例 言

第1章 正伝寺南遺跡の調査 1

1. 調査経過
2. 層 位
3. 遺 構
4. 遺 物
5. 小 結

第2章 針江南遺跡の調査 1 2

1. 遺跡の概要
2. 層 位
3. 遺 構
4. 遺 物
5. 小 結

附 滋賀県下出土の磨製石剣、石戈の資料 1 6

第3章 針江北遺跡の調査 2 2

1. 調査経過
2. 層 位
3. 遺 構
4. 遺 物
5. 小 結

図版目次

図版1 正伝寺南遺跡・遺構

(上) 第9区 SK29(北より)

(下) 第10区 SD47土器集中箇所(南より)

図版2 正伝寺南遺跡・遺構

(上) 第11・12区 全景(西より)

(下) 第11区 SB10(西より)

図版3 正伝寺南遺跡・遺構

(上) 第11区 土坑群(南より)

(下) 第11区 SK32・33(西より)

図版4 正伝寺南遺跡・遺構

(上) 第11・12区 SB11(南より)

(下) 第12区 SB12~15(西より)

図版5 正伝寺南遺跡・遺構

(上) 第12区 SB16~18(南より)

(下) 第12区 SK45(東より)

図版6 正伝寺南遺跡・遺物

図版7 正伝寺南遺跡・遺物

図版8 正伝寺南遺跡・遺物

図版9 鈴江南遺跡・遺構

(上) B地区・b区 全景(北より)

(下) b区 土器出土状況

図版10 鈴江南遺跡・遺構

(上) B地区・C区 全景(南より)

(下) C区 土器出土状況

図版11 鈴江南遺跡・遺物

図版12 鈴江南遺跡・遺物

- 図版13 針江南遺跡・遺物
- 図版14 斜江南遺跡・遺物
- 図版15 県下出土磨製石剣・石戈（1）
- 図版16 県下出土磨製石剣・石戈（2）
- 図版17 針江北遺跡・遺構
(上) C地区上層 遺構群（北より）
(下) C地区上層 木棺墓（南より）
- 図版18 針江北遺跡・遺構
(上) SD 1 (北西より)
(下) SD 1 (西より)
- 図版19 針江北遺跡・遺構
(上) SD 6 (北西より)
(下) SD 6 ⑧出土状況
- 図版20 針江北遺跡・遺構
(上) E地区 全景（北より）
(下) E地区 全景（南東より）
- 図版21 針江北遺跡・遺構
(上) E地区 SB 8～11 (南東より)
(下) E地区 中央の土壙群（南より）
- 図版22 針江北遺跡・遺構
(上) E地区 SB 20 (東より)
(下) E地区 SB 8 柱穴（東より）
- 図版23 針江北遺跡・遺物
- 図版24 針江北遺跡・遺物
- 図版25 針江北遺跡・遺物
- 図版26 針江北遺跡・遺物
- 図版27 周辺遺跡分布図
- 図版28 正伝寺南遺跡・遺構平面図（1）

- 図版29 正伝寺南遺跡・遺構平面図（2）
 図版30 針江南遺跡（B地区）・遺構平面図
 図版31 針江北遺跡・遺構平面図
 図版32 針江北遺跡・遺物実測図（1）
 図版33 針江北遺跡・遺物実測図（2）
 図版34 針江北遺跡・遺物実測図（3）

挿 図 目 次

第1図 正伝寺南遺跡トレンチ配置図	1
第2図 第11・12区 出土遺物実測図	8
第3図 針江南遺跡トレンチ配置図	12
第4図 針江北遺跡トレンチ配置図	22
第5図 遺構平面図 SB8・SB10・SB13・SB19	25
第6図 21実測図	33

表 目 次

滋賀県下出土の磨製石剣・石戈一覧表	19
-------------------	----

第1章 正伝寺南遺跡の調査

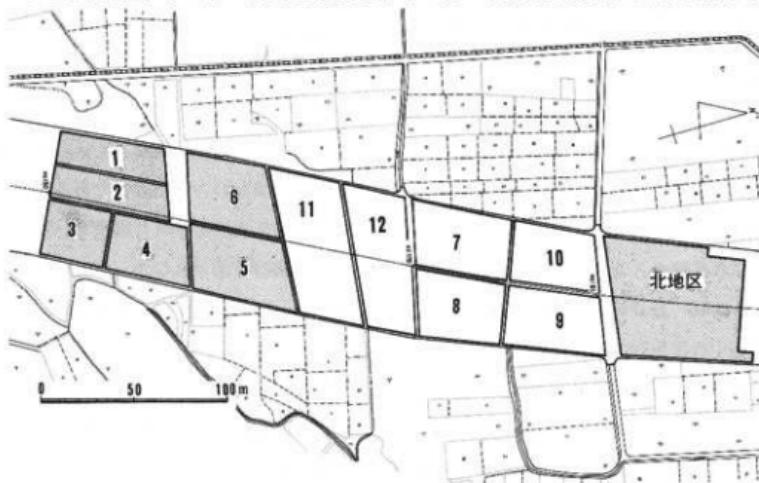
1. 調査経過

57年度、58年度より継続し、58年度に上層遺構の検出に止った第7区・第8区の下層調査より、本年度の調査を開始した。調査範囲を北側へと拡げ、北地区との間に第9区・第10区を設定した。前年度、未買収地区のために未調査であった箇所は、第11区・第12区とし、当地区的調査をもって本遺跡の全ての調査を終了した。

本年度は、上層のみならず、下層においても注目すべき資料が検出された。殊に第9区・第10区より出土した古式土師器の一括資料、第11区・第12区より検出された12世紀～13世紀の建物群などは、湖西地方の歴史を探究するに欠くことのできない良好な資料を提示している。

2. 層位

第9区・第10区において平均的に観察される層位は、第1層・耕土若しくは泥土、第2層・暗黄灰色粘質土、第3層・明青灰色粘質土、第4層・暗灰色粘質土、第5層・灰色砂質粘土、第6層・暗灰褐色粘質土、第7層・明青灰色砂質土で、第1層より



第1図 正伝寺南遺跡トレンチ配置図

第7層上面までは約1.5mを測る。この礫を含まない層位は、北地区へと連続するもので、第8区以南に観察される礫を多量に含む層位とは全く土質を異にする。

第11区・第12区の南北方向では、東側断面の中央において礫面と粘質土面の相違が見られ、以南では、第1層・耕土若しくは泥土、第2層・暗灰褐色土、第3層・黄灰色粘質土、第4層・暗黄灰色土、第5層・暗茶褐色混礫土、以北では、第1層・耕土若しくは泥土、第2層・暗灰褐色土、第3層・灰褐色礫土（礫粒一拳大）、第4層・灰褐色砂質礫土（礫粒一小）、第5層・暗茶褐色混礫土である。12世紀～13世紀代の建物群は、第4層上面より検出されている。この礫面と粘質土面の相違は、ほぼ同一時期の氾濫堆積によって形成されたものと考えられる。東西方向においても氾濫による礫を多量に含む層位形成が顕著である。

第11区・第12区における遺構は、粘質土面が暗茶褐色粘質土、礫面が暗灰褐色混礫土を基本埋土とする。

3. 遺構

検出した遺構は、柵、建物、土坑、溝、ピット群などである。

（第9区～第10区の遺構）

（1）土坑 SK29 第9区の北側に位置する焼土坑である。1m×3mの隅丸方形を呈する。埋土は、上層－黒褐色土、下層－茶褐色土のはば2層に分層される。深さ約15cm。多くの古式土師器が出土している。

SK30 第9区の北東端に位置するSK29同様の焼土坑である。1m×2mの隅丸方形をなす。埋土は黒褐色土の單一層で、出土遺物は極僅かの古式土師器である。

（2）溝 SD45 第10区の第4層（明灰色土）上面にて検出された遺構で、北東方向に流路をとる幅50cm、深さ10cmの小溝である。遺物は検出されなかった。

SD46 SD45に並行する幅約1.2m、深さ約30cm～50cmの溝。遺物は極僅かの土師器片を出土している。

SD47 第10区の最終遺構面である第7層（暗灰褐色粘質土）の上面に検出された。最大幅約4m、深さ約20cmを測る。溝の形状は判然としないが、北東方向に流路をとるものと考えられる。溝幅の狭くなる西側に、古式土師器を主体とする土器の集中箇所が検出された。（スクリーントーン・a）

(第11区～第12区の遺構)

(1) 桁 SA4 第12区の西側に位置し、SD58に並行する南北方向の掘立柱列。4ピットを検出した。柱掘形は径約30cm～50cm、深さ約30cmの梢円形をなす。Pit 4より数個体の土師質小皿が出土した。

SA5 第12区の北西端に位置する東西方向掘立柱列。検出した6ピットは、いずれも径約30cm、深さ約20cmの円形の柱掘形をなす。両端のピットには柱痕が見られる。

(2) 建物 SB10 第11区東側中央部に位置する3×3柱間の掘立柱建物で、柱間距離は約1.5m～1.8mを測る。柱掘形は約40cm、深さ20cmの円形をなす。東側柱列の2ピットを除き、柱根が検出された。他の建物の比してやや軸線を西に振る。

SB11 第11区の北東端に位置し、排水溝に因って間を欠くが、第12区へと続き、東西2間、南北5間の総柱建物と想定される。柱掘形は径約25cm、深さ約20cmの円形をなし、柱間は約2.1mを測る。軸線は、SB10を除く全ての建物同様、昨年度調査の第8区建物群の軸線にはば等しい。

SB12 第12区南端に位置し、SB11に一部重複して直交する、南北2間、東西4間の総柱建物。柱掘形は径約30cm、深さ約15cmの円形をなす。ピット内より須恵質の鉢片が出土している。

SB13 第12区南東端に位置する南北3間、東西2間の掘立柱建物。柱掘形は径約35cm、深さ約20cmの円形である。

SB14 SB13の北端東西柱列を一部共有する2×2柱間の総柱建物。柱掘形は径約20cm、深さ約15cmの円形をなす。出土遺物が小片のみで、SB13との明確な時期差は把握し兼ねるが、短期間の建てかえが考えられる。

SB15 SB13、14と重複する南北3間、東西2間の掘立柱建物。柱掘形はSB13同様である。SB13、14との時期差は判然としない。

SB16 第12区西側に位置する南北2間、東西1間の掘立柱建物。柱掘形は径約30cm、深さ約20cmのはば円形である。

SB17 SB16の西側に直交する南北1間、東西2間の掘立柱建物と考えられる。SB16に比して柱間距離が短かく、約1.7mを測る。SB18の付属施設である可能性が強い。柱掘形などはSB16とはば同様である。

SB18 SB16の南側に位置する2間×2間の総柱建物と考えられる。SB17と一緒に

部ピットを共有する。西側に柱間約1mの距離で廟状の施設が付く可能性がある。SB16、17、18については、柱列の並びを再検討し、個々の建物が相互に機能し合う、一つの家屋形態を構成するものとして把握しなおす必要がある。

(3) 土坑 SK31 第11区北東端に位置し、径約1.7m、深さ約40cmのはば円形をなす。第1層・暗茶褐色混礫土、第2層・暗灰色粘質土に分層される埋土は、当地区土坑群の平均的な埋土である。出土遺物は、土師質小皿、下駄、箸などである。

SK32 SK31の西側に位置する東西約1m、南北約1.4m、深さ約35cmの楕円形をなす。底部の北側寄りに幅約10cm、径約40cmを測る曲物の側板が、更に東側寄りの壁には3個体の土師質小皿が、西側の壁には多くの箸が検出された。

SK33 SK32の西側に位置し、径約1.1m、深さ約35cmのはば円形をなす。約15cmの深さで数個の河原石が見られ、径約5cmの竹筒が南北に横たわる。土師質皿や箸の出土状況より、いずれも廃棄されたものと考えられる。

SK34 SK32の南側に位置し、東西約2m、南北約1.2m、深さ約35cmの長方形をなす。少量の土師質皿片を出土している。

SK35 SK34の南側に位置し、径約1.3m、深さ約40cmのはば円形をなす。出土遺物は土師質小皿の他、底部より上面に到る板材が検出された。

SK36 SK35の西側に位置する東西約1m、南北1.2m、深さ25cmの楕円形を呈するものである。土師質皿片が出土している。

SK37 第11区の中央に位置し、東西約2m、南北1.2m、深さ約30cmの長方形をなす。埋土は暗灰褐色混礫土で、他土坑とは異なり、古式土師器を多く出土した。

SK38 第12区中央部南端に位置し、東西約1.5m、南北約1m、深さ約25cmの隅丸長方形をなす。極僅かの土器片を出土した。

SK39 SK38の西側に位置し、径約1m、深さ約20cmの隅丸方形をなす。

SK40 第12区中央部に位置し、径約1m、深さ約10cmの隅丸方形をなす。

SK41 SK40の西側に位置し、東西1.2m、南北80cmの隅丸長方形をなす。

SK42 SK41の北側に位置し、径約50cm、深さ約30cmの円形をなす。古式土師器と考えられる甕が、口縁部を打ち欠いて埋め込まれていた。

SK43 第12区北西端で、SA5の南側に位置し、南北約1.5m、東西約2.5m、深さ25cmのはば隅丸長方形をなす。埋土は青灰色粘土で、無遺物。

SK44 S K43の西側に位置し、南北約3m、東西約70cmの不定形な長形をなす。S K43と埋土など同様相を呈する。

SK45 S K43・44の間にS K43の一部に重複して位置する。南北約2m、東西約1.3m、深さ約40cmの長方形で、土止めの側板を四方に配する。この形態は前年度調査の第8区S K27と同様相を呈するものである。底部に数個の河原石が残存し、内半数に焼痕が観察された。埋土は灰褐色粘質土。土師質小皿、須恵質鉢片などが検出されている。

(4) 溝 **SD48** 第11区中央を北流する南北溝。幅2m、深さ約30cmを測る。第3層上面より検出され、幅2m、深さ約30cmを測る。前年度調査の第5区・SD24に連続するものと考えられる。少量の土師質皿などの土器を検出した。

SD49~57 SD48の西側で、第11区中央部に並行して北流する小溝群。幅約50cm、深さ約15cmを測る。立地などはSD48と同様相を呈する。

SD35 前年度に検出された第5区・SD35に連続するもので、第5層上面より検出された。幅80cm、深さ50cmを測る。前年度、多量の古式土師器を出土したが、その上流にあたる本年度の調査地点では僅かの土器片に止る。

SD58 第12区の西側に位置し、南流する幅約60cm、深さ約10cmを測る南北溝。SA4と並行し、SA4とSB16・17の間に流路をとる。その幅の広さなど、建物に対する雨落ちとは把え難い要素を有する。建物群間の区画機能の兼備などを考慮する必要がある。

SD59 SD58に直交して西流する幅約50cm、深さ15cmの東西溝。両端とも判然としない。

SD60 SD59に並行して流路をとる東西溝。幅約90cm、深さ約15cmを測る。両端とも判然と検出し得なかった。

SD61 第12区の東南端を南流する幅約1m、深さ10cmを測る南北溝。羽釜片、土師質小皿片などの土器が出土している。

(5) その他 **SX1** 第11区中央部に位置する堅穴住居状の落ち込み。明確なプランなどはなく、深さも一定しない。一辺約6m、深さ約10cmを計測する。遺物は古式土師器片を検出している。

SX2 SX1に重複して先行する堅穴住居状の落ち込み。一辺約8.5m、深さ15

cmを測る。SX1同様に竪穴住居址の残骸を想定しているが、明確には把握し兼ねる。

SX3 遺物が集中して検出された箇所である（スクリーントーン・b）。羽釜、須恵質の鉢、土師質小皿、陶磁器類、自在鉤や田下駄と思われる木材の焼片など、当時の生活状況が窺知されるセット資料が検出されている。伴う遺構が明確に把握されず、焼けた建物が整理、集積されたものか、礎石建物の礎石が耕作などによって除去された遺構面であるのか判然としない。

SX4 第12区の西側、SK44の東側に位置する。径約2m前後の不定形の土坑状の掘り方内に径30cmの柱根が存在するものである。土坑の深さは一定せず、最深部で約30cmを測る。柱根の掘り方は明確ではなく、下部には根掘みを有する。この柱根は単独で存在しており、伴うピットなどは確認し得なかった。

SX5 第12区の東側北端に位置する。排水溝によって大半を欠くため、全形状を把握し兼ねるが、一辺約3~4mの四角形状をなすものと想定される。羽釜片や多くの土師質皿片が出土した。

4. 遺 物

出土した遺物は、古式土師器、須恵器、土師質皿、羽釜、陶器の他、木製品などである。以下、遺構より出土した主な遺物に関して、その概略を記す。

(第7区)

第7区の下層調査においては、遺構の検出はなかったが、包含層などより古式土師器の良好な資料を得ている。

(1) は垂下口縁の、所謂パレススタイルの壺である。口径約16cm、胴部最大径約25cm、底部径6cm、器高25.5cmを測る。口縁部内側の平坦面には羽状刺突列点文を描く。口縁帶には3本の回線を廻らし、円形浮文が3個1単位で4方に配される。頸部には竹管文を廻らす突帯を貼り付け、体部には沈線と刺突列点文、刺突文を交互に施文する。体部下半は斜目方向のハケ調整で、朱の付着が観察される。

(2) は口縁部を緩く受口状に成形した壺である。口径約15.6cm、胴部の最大径約20.5cm、底部径約4cm、器高24.5cmを測る。頸部に斜目方向の沈線による施文を廻らし、胴部上半のハケは波状に、下半は斜目に調整する。

(3) は口径18.5cm、底部径15.5cm、器高13.2cmを測る器台である。内外面ともへ

ラミガキし、三方に円孔を穿つ。

(第9区)

SK29 口縁部より底部までの復元はし得なかった。口縁部片には、内彎して立ち上がるくの字状口縁の類が多く見られ、また有段口縁や受口状の口縁なども若干観察される。

(第10区)

SD47 土器集中箇所（スクリーントーン・a）より古式土師器が一括して検出された。

(4)～(6)は壺の口縁部片である。(4)は受口状の口縁部で、中央の屈曲部に刺突列点文が、頸部より肩部にヘラガキ沈線が廻る。更にその下部に刺突列点文を配し、ハケ調整は波状に施す。(5)は有段口縁で、内外面とも密なヘラミガキをタテ若しくはナナメ方向に施す。非常に肉厚である。(6)は端部を波状に刻む口縁部で、口径約20cmを測る。内外面とも幅広のハケ調整を強く施す。

(7)は口縁部を欠くが壺と考えられる。胴部最大径は約30cmを測る。外面には丁寧なヨコ方向のヘラミガキを全面に施し、内面には板状工具によると思われるハケ調整を施す。外面の胴部下半には焼痕が顯著である。

(8)は受口状口縁部をもつ鉢で、口径約15.5cm、器高約12cmを測る。外面は口縁部より体部下半までハケ調整し、口縁部はナデ消す。底部はヘラケズリ。内面は底部にハケ調整を施す他、ナデ調整する。口縁屈曲部には刺突文、頸部より肩部には数条の沈線が廻り、その直下に刺突文を配する。

(9)、(10)は高坏である。(9)は口径約20.5cm、底径約13.5cm、器高21cmを測る。脚部内面を除く全面に密なヘラミガキをする。受部、及び脚部が内彎して拡がるタイプで、愛知県欠山遺跡出土遺物に同様の高坏を見い出すことができる。三方に円孔を穿つ。(10)は口径約25cm、底径約14cm、器高21.2cmを測る。黄灰褐色の砂質分を多く含む軟質胎土で、剥離が著しく調整は判然としない。(9)に比して、受部の口径に対する深度が浅く、受部、脚部ともに緩く外反する。

(11)、(12)は器台である。(11)は脚部下半を欠くもので、内外面ともタテ方向にヘラミガキしている。3方に円孔を穿つ。(12)は受部を欠くもので、外面はタテ方向に丁寧なヘラミガキを施す。肉厚な成形で、円孔を3方に穿つ。

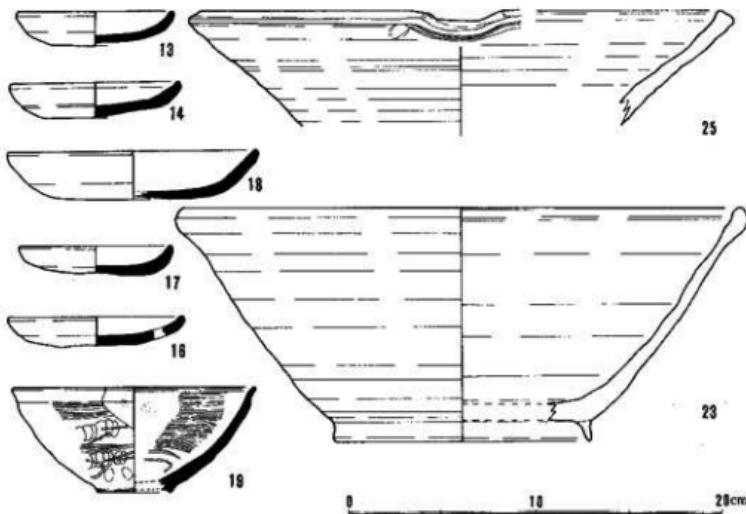
(第11区)

SK32 (13)～(15)は土師質小皿である。いずれも口径は約9cmを測り、体部の引き上げは1段ナデと考えられる。(13)はやや粗雑な成形で、体部のヨコナデ幅は狭い。淡茶褐色。(14)は比して精良な成形で、外面底部のユビオサエも丁寧に施される。黄灰褐色。若干の煤が付着している。(15)は粗雑な成形で、底部不調整、凹凸が著しい。明灰褐色。

SK33 (16)、(17)は土師質小皿で、いずれも口径約9cmを測る。(16)はヨコナデ、底面ユビオサエなど丁寧な調整である。焼成後、体部に1箇所円孔を穿つ。茶褐色。(17)は比して粗雑な調整で、底部は不調整、板状の圧痕が観察される。淡茶褐色。

(18)は口径約14cmを測る大型の皿で、2段のヨコナデによって体部を引き上げている。底面はユビオサエ。淡茶褐色。若干の煤が付着している。

Pit 3 第11区の北東端に位置する。湖西地域では出土例が限られている(19)の瓦器焼を出土した。復元口径約128cm、器高約5.5cmを測る。体部外面は粗雑なユ



第2図 第11・12区出土遺物実測図

ビオサエの後、粗いヘラミガキを施す。体部内面のヘラミガキは密で、口縁端部には沈線が残る。内外面とも一部煤が剥離している。高台は断面四角形の小さな貼り付け高台である。

SK37 (20) は口径約18.5cm、底径約15cm、器高約15cmを測る器台である。外面はヘラミガキを施すが、内面調整は判然としない。比して肉薄な成形である。三方に円孔を穿つ。

(第12区)

SA4 (Pit4) (21) は土師質小皿で、口径約8cmを測る。1段のヨコナデによって体部を引き上げており、底面のユビオサエは丁寧である。黄灰褐色。煤の付着が顕著である。

SX3 (スクリーントーン・b) 土師質皿、羽釜、須恵質鉢、国産陶器、白磁など多種多量の土器を検出した。

(22) は土師質小皿で、口径約8cmを測る。底部際をオヤユビで強く押さえるための支点をヒトサシユビなどによって口縁部に依存したために、口縁部には外面下りの平坦面を形成し、端部は肥厚している。底部際のオサエが強いため、ヨコナデする体部との間が急角度で結ばれる。茶褐色。

(23)～(26) は須恵器の鉢である。(23) は口径約29.6cm、器高約125cmを測る。高台は肉薄で貼り付け。口縁部は肥厚して玉縁状におさめる。(24) は口縁部片で断面は四角形状をなす。(25) は片口の口縁部を有する。(26) は(23)と同様相を呈するもので、高台はやや肉厚である。

(27)～(30) は羽釜の口縁部片で、(31) はいずれかに伴うものと考えられる鼎形の足である。いずれも幅のない鍔で、(28)、(29) は断面四角形をなす。内面は斜目方向のハケ調整。外面の煤の付着は顕著である。

5. 小 結

(1) 遺構の全容

今年度の調査に拠って正伝寺南遺跡のほぼ全容を把握することができた。第7・8区と第9・10区間に顕著な土質変化が見られ、連関して遺構立地の在り方も全く相違するものとなる。第9・10区より北地区に拡がる礫を含まない堆積土は、湧水点が浅

く、然も上水を溜め易い湿地であり、居住空間を求めるには多くの労力と土木技術を必要とする。由に第7・8区以南に検出されている様な古代末から中世に到る遺構や遺物は全く見られず、下層において、古墳時代前期と考えられる氾濫流路や連関して形成されたと想定される生活遺構を伴わない土器溜まり状遺構などが検出されるに止っている。

第9区、SK29の性格については判然としない。この地区では他に見られない上層部からの検出遺構であり、明確な時期は把握し得ていないが、ほぼ古式土師器の範疇と考えられる。本来、隨處に検出される可能性をもつ土師器焼成地を想定するのは短慮の域を越えるものではないが、あらゆる視点を考慮し検討を加えなければならない。

当遺跡において、居住空間を伴った生活遺構の検出を見るのは第4区～第6区の10世紀後半代の遺構群からである。存続期間などは把握し得ていないが、第7区～第12区の遺構群とは一線を画するものと考えられ、遺構の拡がりを求めるならば東西方向に留意される。

第7区～第12区の遺構群は12世紀より13世紀前半までに比定し得るものである。ほぼ同一方向に軸線をとる建物群は、3～4に区画することが可能で、莊園盛行期から武家社会への胎動を迎えるこの時代の莊園管理体制の一端が窺知されるのではないだろうか。

(2) 遺物の傾向と年代

検出された主たる遺物は、a) 第9・10区の古式土師器、b) 第11・12区の土師質皿を主体とする12世紀～13世紀の遺物に大別される。

a) 古式土師器 第10区、SD47の一括検出の古式土師器は、昨年度、北地区より多量に出土した弥生時代終末期より古墳時代前期にかけての出土土器の傾向に共通している。(1)の垂下口縁をもつ壺や(9)の高環などには東海地方、殊に欠山期の遺物の要素が観察され、この時期に東海地方からの搬入品が少なくないことを示唆している。第1・2区出土の布留式を主体とした古式土師器を含め、産地比定など再検討しなければならない。

b) 12世紀～13世紀の遺物 主として第11区の土坑群出土の土師質皿、第12区、SX3出土の土師質皿、須恵質の鉢、羽釜などのセットが注目される。土坑出土の土師質小皿はいずれも12世紀～13世紀前半代に比定されるものと考えられる。(16)の体

部に尖孔のある土師質小皿については資料を得ることができず、類例を検討している。

S X 3 に多く見られる須恵質の鉢には、その産地を東播磨地方に求め得るものと常滑地方に比定されるものの両者がある。(25) タイプの片口鉢は前者に、(23) タイプの口縁部が若干肥厚し、高台の付く鉢については常滑焼にその類例を得ることができる。しかし、東播磨地方の神出古窯址群の大谷窯址において、高台付の鉢が焼かれている報告もあり、第 4 区より多量に出土した糸切り底の須恵器坏同様課題を残している。⁽⁶⁾

<註>

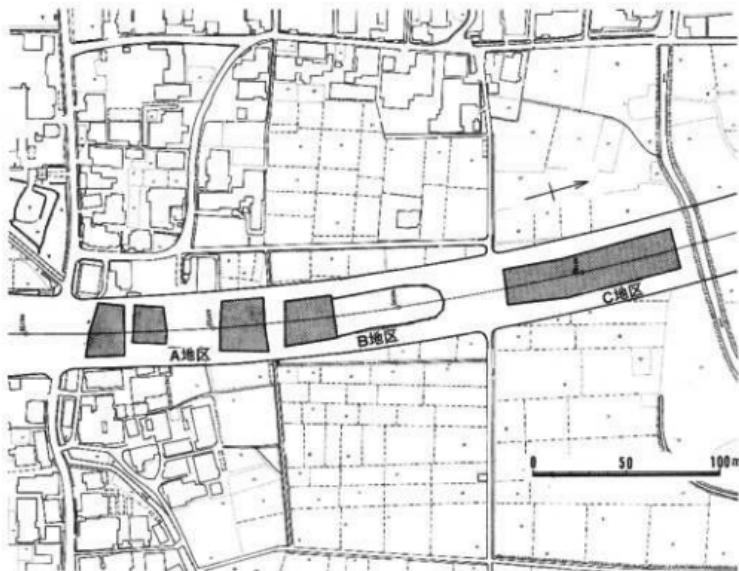
- ① 清水尚・堀内宏司 「正伝寺南遺跡の調査」 (『国道161号線バイパス関連遺跡調査概要』3 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和58年)
- ② 清水尚・氏丸隆弘 「正伝寺南遺跡の調査」 (『国道161号線バイパス関連遺跡調査概要』4 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和59年)
- ③ 古谷芳幸・山口順子 「正伝寺南(北地区)の調査」 (『国道161号線バイパス関連遺跡調査概要』4 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和59年)
- ④ 大參義一 「弥生式土器から土師器へ」 (『名古屋大学文学部研究論集』 47輯 1968)
- ⑤ 丹治康明 「東播磨の中世須恵器生産」 (『各地域における中世土器研究の現状—第3回 中世土器研究集会発表資料』 中世土器研究会 1984年)

第2章 針江南遺跡の調査

1. 遺跡の概要

調査対象のバイパス工事予定地内における針江南遺跡は、針江大川を北限に南は霜降と深溝を結ぶ県道にまで広がる。本遺跡については昭和57年度の試掘調査で、上層に平安時代、下層に弥生時代中期の遺物包含層および遺構が重複していることが明らかになった。

今回の調査地は、昨年度全面積の約%が対象地である。



第3図 針江南遺跡トレンチ配置図

2. 層位

基本層位は、第1層・表土（耕土）、第2層・暗茶灰色粘質土層（遺物包含層）、第3層・青灰色粘質土層からなり、各層の厚さは第1層約40cm、第2層約20~30cmであった。このうち第2層中には、弥生時代中期の土器と平安時代の灰釉陶器や綠釉陶器、須恵器、土師器などの破片が混在する。この第2層を除去すると、第3層の上面

で遺構が検出された。

3. 遺構

遺構としては、溝、土坑、旧河道などが検出された。

(1) 溝 SD1 トレンチの北側中央から東西に流れる溝で、溝幅1.5m、深さ約30cmを測る。

SD2 トレンチのほぼ中央から東西に流れる溝で、溝幅60cm～1m、深さ30cmを測り、溝の東側では、長さ2.5m、幅2cmの2枚の板が両側に杭を伴って埋設されていた。また溝は、中央から西よりで耕作時におけると考えられる搅乱をうけて分断されている。

SD3 トレンチの南東部に位置し、東西方向に延びる溝で溝の南西側は、SD4に削平されている。溝幅は2.8m～3.5m、深さ20cmを測る。溝内からは、弥生時代中期の土器片と木材片が検出された。

SD4 トレンチを東西に流れる溝で、溝幅1.7m～2.7m、深さ約90cmを測る。溝内からは、弥生時代中期の土器片とほぼ完形品の鉄劍形石劍が1点出土した。

(2) 土坑 SK1 長軸1.2m×短軸70cmの土坑で、深さ20cmを測る。

SK2 長軸90cm×短軸60cmの土坑で、深さ20cmを測る。

SK3 長軸1.5m×短軸1.3mの土坑で、深さ15cmを測る。坑内からは、弥生時代中期の土器片が数点検出された。

SK4 SD1の北側に位置し、長軸5.1m×短軸2.1m、深さ15cmで中央に向って緩やかに落ち込む。土坑というよりも旧地表面の窪みかと思われる。

SK5 旧河道1の南側に位置し、長軸3.7m×短軸1.3m、深さ15cmで中央に向って緩やかに落ち込む。土坑というよりも旧地表面の窪みかと考えられる。

SK6 長軸1.1m×短軸90cmの土坑で、深さ15cmを測る。

SK7 トレンチの南端に位置し、長軸2.3m×短軸1.6mの土坑で深さ15cmを測る。坑内からは、弥生時代中期の土器片が数点出土した。

SK8 長軸1m×短軸70cmの土坑で深さ15cmを測る。

SK9 長軸1.4m×短軸1.2mの梢円形の土坑で深さ10cmを測る。

(3) 旧河道 旧河道1 SD1の北側に位置し、河幅は最長で約3.7m、最短

は1.4m、深さ約40cmを測り、東西方向に約14m検出した。河道内からは、弥生時代中期の土器片が數点出土した。

4. 遺 物

(1) 弥生式土器

弥生式土器の大半は、包含層中より出土したもので、時期的には弥生時代中期前半から中頃（第Ⅱ様式～第Ⅲ様式）のものが大部分を占める。

壺 壺には、形態や文様などでいくらかの差異が認められる。

壺（1）は、復元口径15cm、残存器高27.5cmで口縁部がゆるく外方へ立ち上り、櫛描きによる直線文と波状文を口縁部から体部にかけて施している。

壺（2・13・14・15）は、口縁端部をヘラ状工具または、指先による押圧を施した壺で（2）は、復元口径36.5cm、残存器高18.8cm、頸部から体部にかけて櫛描きによる直線文を施す。（13）は、外面に櫛描直線文を施している。

壺（4）は、口径13.3cm、器高22.9cmで口縁部は外反し口縁部下半より体部下半にかけて縦方向のハケを施し、口縁内面には、横方向に粗いハケを施している。

壺（3）は、口径15cm、残存器高16.9cmで口縁部は粘土紐の貼付けで突起状にめぐり、頸部から体部にかけて連結櫛描直線文をめぐらしている。

壺（7・8・9・10）は、口縁端部を水平近くにまで外反させ、口縁部内面を横ハケ、口縁端部に（7・9）は櫛描波状文、（8）は直線文を施し、口縁部下半から頸部にかけてそれぞれ直線文、波状文の櫛描文をめぐらす。

（11・12）は、筒状の細い口頸部の壺で口縁端部に刻み目をもち、頸部にかけて櫛描直線文を施す。

鉢（5）は、復元口径29cm、器高14.3cmで口縁部はゆるく外方にのび、内外面はハケ調整を施す。

（6）は、復元口径23.4cm、残存器高15cmで、口縁部が外方に短かく立ち上り外面はススの付着がみられ、内外面とも細いハケ調整を施す。

壺（16・17）は、強く外反する短い口頸部をつけた無文の壺。

（18）は、無頸壺で口縁部下方に2条の刻み目凸帯と1孔の小孔をうがち、さらに体部には櫛描波状文を施す。

甕・壺では、大きく3タイプがみられる。(19・20・21・22・25・28・29)は、口縁部を短かく外反し、口縁端部に刻み目をめぐらす。外面はハケ調整である。

(23・26・27)は、口縁部を短かく外反し、口縁端部に刻み目とヘラ状工具による上方へのつまみ上げが数箇所みられる。

(24)は、口縁部を短かく外反し口縁端部下半にヘラ圧痕をめぐらす。

蓋形土器(32)は、笠形で突起状のつまみをそなえ、櫛描文を施し、直径9.9cm、周縁に2孔の紐孔をあけている。

高环脚部？(30)は、1条の沈線と刻み目を伴う貼付文がみられる。

円板状土製品(31)は、直径5.6cm、厚さ6mmで甕か壺の体部を再加工して作られている。

(2) 石器

石器の中には、石劍・柱状片刃石斧・投弾・石製円板・石斧片など数点が認められた。

石劍(5)は、鉄劍形石劍で長さ21.5cmで幅は刃部で2.4cm、基部で3cm、重さ60.5gを測り、材質は頁岩である。

柱状片刃石斧(1)は、最大残存長8.5cm、幅3.3cm、重さ164.5gでその断面は部厚く、また刃部は長辺側で長軸方向に研磨されている。材質は、頁岩である。

投弾(3)は、長軸4.9cm、短軸4.2cm、重さ89.3gで材質は硬砂岩である。

石製円板(4)は、直径5.8cm、厚さ1.8cm、重さ91.4gでほぼ円形である。材質は硬砂岩である。

磨製石斧片(2)は、最大残存長9.2cm、最大残存幅4cm、重さ62.8gで材質は頁岩である。

5. 小結

昨年度の調査に引き続き本年度の調査においても包含層を中心に出土した弥生式土器には、文様に櫛描文の多様さがみられる。一方、壺・壺さらに新らに鉢が加わりそれらの形態の特徴と凹線文が含まれていないところから、中期でも第Ⅱ様式から第Ⅲ様式のものと思われる。

石器では、破片などを含めても数点しか出土していないが、今回磨製の鉄劍形石劍が完形品で1点出土している。

附章 滋賀県下出土の磨製石剣・石戈の資料

西 田 弘

滋賀県高島郡新旭町針江の針江南遺跡に関する調査結果の報告が公にされるに当たり、その出土遺物の中に磨製石剣が含まれているため、これに関連して県下出土の磨製石剣・石戈の資料を集成付載することとなった。

県下出土の磨製石剣に就いては、1968年10、11、12月発行の「滋賀文化財研究所月報」の7、8、9の3号にわたり、黒崎直氏を中心に「滋賀県下発見磨製石剣資料」として12個の磨製石剣が報告された。この時報告されたのは、当時知られていた県下出土の磨製石剣の総てであったが、これらはたまたま発見されたものであり、学術調査による発見の資料は一例も含まれていなかった。従って、完形又はある程度の長さを有するものばかりで、人の目にとまりにくい小破片は1点も存在しなかったのである。その後各地で工事等に伴う事前の調査が実施されるに従い、発見例もその数を加え、その中には、完形品又はそれに近いものもあるが、小破片が数多く含まれている。また、未製品と推測されるものや、本来は磨製石剣であったのが、後にその先端部だけを磨製石鎌として再加工したと推考されるものも數点認められるのである。今回の資料の集成に当っては、推測の域を脱しない再加工の磨製石鎌は除外し、現在までに知られたものを一覧表として示すこととした。個々の遺跡の詳細な説明は、既に報告されているものも多いので重複を避けたく、文献欄に掲げた報文により遺物の実状を承知されたい。ただ読者の理解の一助ともなればと考え、遺物の写真を掲載することとした。現在その遺跡の出土品が整理中のため、報告が未公刊のものもあるが、それらに就いては、調査時に行なった略測定を一覧表に述べておいたので、正式報告の際の正確な計測の結果と若干の誤差があるかも知れないことを述べて、詳細はその報告書の公刊される日を待ちたい。ただ、昭和46年調査された長浜市鴨田遺跡出土の鐵劍形石剣の1破片と石戈と思われる1破片については、報告の機会も無いと思われる所以、この紙幅を借りて、その概要を報告することとする。

長浜市鴨田遺跡出土鐵劍形石剣破片

片面が剥離した現存長4.7cmの破片である。幅は、片がわは刃部まで残っているが、他は片面剥離の際剥離してしまったようで、復元すれば3.8cmあったと推定される。

また、厚さも復元して0.8cmと推測される。剣身中央部あたりの破片であるため、茎端部や刃先の姿は不明である。残った片面で見ると、鎬がつくられている。出土位置は、当時の調査のデータで「G29F黒色土層」である。

長浜市鴨田遺跡出土石戈

両面が剥離した基部の破片である。片がわの刃部がかろうじて残っており、それを見ると刃部が僅かながら内彎しているため、磨製石剣とするにはやや不自然さが認められる。したがって、一応石戈を見ておく。ただし、茎の部分は僅かに認められるだけである。その出土位置は「G20D溝8上層」である。

<参考文献>

- ① 小江慶雄 滋賀県新旭町安井川御屋敷弥生遺跡について（史想7）
- ② 西田弘 高島郡新旭町安井川の弥生式遺跡（滋賀郷土史1）
- ③ 黒崎直 高島郡新旭町安井川御屋敷遺跡発見磨製石剣（滋賀文化財研究所月報9）
- ④ 林博通ほか 美園遺跡発掘調査報告
- ⑤ 山口順子・兼康保明 高島郡今津町弘川遺跡（ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書III-3）
- ⑥ 有光教一 朝鮮磨製石剣の研究
- ⑦ 西田弘・黒崎直 大津市滋賀里茶山発見磨製石剣（滋賀文化財研究所月報8）
- ⑧ 田辺昭三ほか 湖西線関係遺跡調査報告
- ⑨ 古谷芳幸ほか 大伴遺跡発掘調査報告
- ⑩ 西田弘・黒崎直 大津市膳所本町地先湖底遺跡発見磨製石剣（滋賀文化財研究所月報7）
- ⑪ 近江栗太郎志1
- ⑫ 島田貞彦 有史以前の近江（滋賀県史跡調査報告第1冊）
- ⑬ 木原克司 草津市志那中遺跡出土遺物と層序（ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書III-II）
- ⑭ 山崎秀二 吉身西遺跡発掘調査抄録（乙貞第14号）
- ⑮ 山崎秀二ほか 発掘だより5、下之郷遺跡（乙貞19号）
- ⑯ 大橋信弥 守山市服部遺跡出土の磨製石剣について（滋賀文化財だよりNo.28）
- ⑰ 岩崎直也 湖東における高地性集落の調査（滋賀文化財だよりNo.68）
- ⑱ 谷口義介 湖北の遺物（中日新聞）
- ⑲ 中谷雅治ほか 長沢遺跡（国道8号線バイパス関連遺跡調査報告書III）
- ⑳ 山崎秀二ほか 守山市欲賀町所在欲賀南遺跡（守山市文化財調査報告書第10冊）

- ④ 滋賀県史蹟名勝天然紀念物概要
- ⑤ 小江慶雄 琵琶湖先史土器序説
- ⑥ 西田弘・黒崎直 大津市錦織町皇子山発見磨製石剣（滋賀文化財研究所月報8）
- ⑦ 黒崎直 大津市瀬田神領町三大寺山出土磨製石剣（滋賀文化財研究所月報7）
- ⑧ 西田弘 大津市膳所本町地先湖底発見磨製石剣（滋賀文化財研究所月報8）
- ⑨ 黒崎直 草津市志那中町出土磨製石剣（滋賀文化財研究所月報7）
- ⑩ 江南洋・田村陽子 近江八幡市北之庄出土磨製石剣（滋賀文化財研究所月報7）
- ⑪ 黒崎直 長浜市北舟町地先湖底発見磨製石剣（滋賀文化財研究所月報8）
- ⑫ 黒崎直 東浅井郡湖北町尾上地先湖底発見磨製石剣（滋賀文化財研究所月報8）

滋賀県下出土の磨製石剣・石戈一覧表

法量欄 現は現存値 復は復原値を示す

出土地	法量(cm)			所蔵者 (保管者)	備考	写真番号	文献番号
	長さ	幅	厚さ				

有植石剣

新旭町安井川	現14.9	3.65	1.15	新旭町教委	上半部	13	①② ③④
大津市真野京ヶ山	現5.8	4.5	復1.6	滋賀県教委	基部に近い部分の破片	19	

鉄劍形石剣

今津町弘川遺跡	現22.4	3.1	0.7	滋賀県教委	剣先部を欠くほぼ完形品	14	⑥
新旭町針江南遺跡				同上	本報告書で報告		
新旭町安井川	現8.4	3.8	1	新旭町教委	剣先部を欠く上部破片	44	③④
大津市滋賀里茶山	14.9	2.7	0.6	近江神宮	完形、欠損後の再加工品と推考される。	7	⑥⑦ ㉙
大津市湖西線関係遺跡	現5	復3.4	0.8	滋賀県教委	破片 Ⅲ E 区	43	⑧
	現2.8	現2.8	0.7	同上	破片 Ⅲ E 区	39	⑨
大津市皇子山	現17.8	3.75	1	近江神宮	下半部	1	⑥㉙
大津市瀬田三大寺山	現9.2	2.5	0.7	建部大社	剣先部を欠く上半部	27	⑪⑫ ㉙
大津市南滋賀大伴遺跡	現5.6	現3	1	滋賀県教委	破片	22	⑩
	現5.3	現2	現0.3	同上	報告書では、石庖丁としているが、石剣の可能性を註記している。	28	⑩
	現4.7	現2.2		同上	破片、全面殆んど剥離刃部のごく一部が残存している。---応石剣と推定。	21	
	現3.8	現2	現0.6	同上	破片 石剣と推定	29	
大津市錦織大將軍遺跡	現7.8	現3.8	0.9	同上	基部の破片	25	
	現5.7	現2.65	現0.4	同上	破片	24	
大津市膳所地先湖底	31.7	4.6	1.2	小田利広	完形	15	㉙

				(県立琵琶湖文化館)			
	23.6	3.4	0.9		完形、火災にて焼失、基部の状態から再加工。	4	㉙
草津市志那中	21.2	3.05	0.9	中村史彦 (県立琵琶湖文化館)	完形	5	㉑㉒ ㉓
草津市志那中	現 4	現 4	現 0.7	滋賀県教委	破片	/	㉔
守山市下之郷遺跡	現12.2	4.1	1	守山市教委	基部の一部を欠く下半	/	㉕
守山市下之郷遺跡 (旧称古身西遺跡地域)	現 7.1	現 3.4	1.4	守山市教委	基部の破片、刃部一部残存	40	㉖
	現 8.5	現 3	0.7	守山市教委	基部だけで身部を欠く	16	㉗
	現 4.7	現 3.2	0.8	同 上	剣先部の破片	17	
	現 9.3	現 2.2	1.2	同 上	片がわのみの一部破片	18	
	現11.2	現 2.7	現 0.6	同 上	両面剥離、一部が残存	8	
	現 3.7	2	1.3	同 上	基部の破片、身部が欠落しているので右剣と断定できない。	41	
守山市播磨田東遺跡	11.8	2.7	0.6	守山市教委	特殊器形、基部に一部欠損があるがほぼ完形	20	
守山市脛部遺跡	復22.9	3.5	1.1	(守山市埋文センター)	剣先部の少部を欠くほぼ完形 A地区5号方形溝墓上層	10	㉘
	現13.3	3.55	1	(同 上)	下半部 D地区住居址	9	㉙
	現 9.6	3	0.7	(同 上)	下半部 D地区溝内	11	㉚
	現 3.35	2.1	0.6	(同 上)	剣先部 B地区住居址	34	㉛
	現 4.8	2.85	0.78	(同 上)	破片 D地区住居址	37	㉜
	現 4.8	2.7	0.98	(同 上)	破片 B地区住居址	35	㉝
	現 6.3	3.15	復 0.9	(同 上)	破片	33	
	現 4.2	現 1.7	復 1.6	(同 上)	片面剥離の破片	36	
	28	5.8	1.4	(同 上)	磨製石剣の未製品と推定	42	

竜王町岡谷堤ヶ谷遺跡	21.2	5.2	1	滋賀県教委	有柄式の完形品	23	⑦
近江八幡市北之庄	現10.2	2.4	0.8	江南洋 (近江八幡市郷土資料館)	下半部	2	⑧
能登川町キヌガサ	13.5	3.7	0.9	中村慶次郎	基部の再加工	12	⑨
近江町宇賀野	16.1	3.2	0.9	滋賀県教委	完形	26	⑩
近江町長沢	現11	4	復1	長沢公民館	劍先部を欠く上半部、片面はとんど剥離	30	⑪
長浜市鴨出遺跡	現 4.7	復 3.8	復 0.8	滋賀県教委	破片、片面剥離	45	
長浜市鴨田遺跡 (ほ場整備関連)	現 3.7	現 3	復 1	長浜市教委	劍先部破片、片面一部剥離 面あり。	/	
	現 3.6	現 2.7	現 0.7	同 上	劍身部の破片	38	
	現 9.2	現 1.7	現 0.5	同 上	一部残存	/	
	現 7.3	2	0.6	同 上	劍先部及び下半を欠く 細いので確言をはづかる	32	
	現 7.6	3	現 1.1	同 上	一部に研磨、未製品か	/	
	長浜市北舟町地先湖底	20.1	3.45	1.25	岡本保次郎 (近江風土記丘資料館)	完形	3
湖北町尾上地先湖底	20.5	3	0.65	尾上公民館	完形	6	⑬⑭ ⑮⑯

石 戈

今津町弘川遺跡	現14.4	現 5.2	0.9	滋賀県教委	石戈未製品	31	⑤
守山市欲賀南遺跡	現 4.8	現 3.8	現 0.5	守山市教委	破片、片面剥離の有柄石戈	46	⑯
長浜市鴨田遺跡	現 5.5	現 2.5	現 0.5	滋賀県教委	基部の破片、両面剥離	47	

注 1. 当表に記載しなかったが、大津市南大寺東光寺遺跡(滋賀県教委調査)出土品中に、あるいは磨製石剣とすべきかとも思われるものが一点ある。これについては今後の研究に待ちたい。

2. 当表写真番号欄の「/」は図版に掲載されていないことを表示するもので、当該遺物の写真が無いのではない。

第3章 針江北遺跡の調査

1. 調査経過

針江北遺跡は、昭和57年度に遺跡南側の調査を実施しており、今回の調査は残りの部分を対象とした。対象地のはば中央を東西に流れる水路を境に南側をC地区、北側をD地区E地区とした。調査の中心線は、国道センターNo.105とNo.104を結ぶ線を新たに設定した。

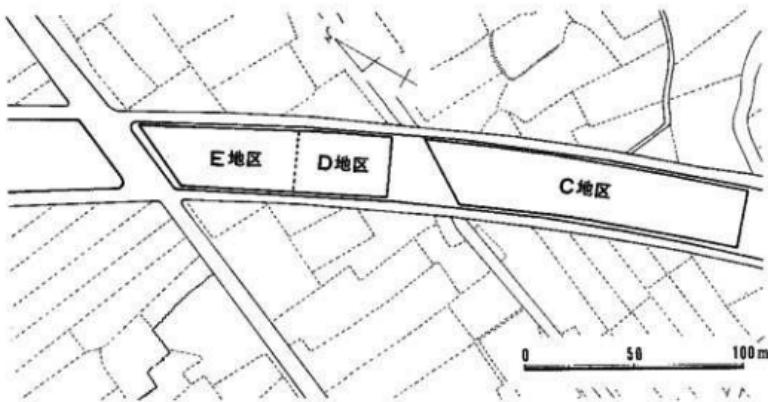
今年度の調査をもって針江北遺跡の調査は終了した。

2. 層位

C地区では、3層の遺構面が検出された。全体に平行堆積で、基本的に観察される層位は、第1層表土（耕土を含む）、第2層明茶灰褐色粘土、第3層細砂層、第4層明褐色粘土、第5層砂礫層（地山）、それぞれの厚さは、第1層約70cm、第2層約20cm、第3層約60cm、第4層約30cmで、遺構は、第2層上面、第3層上面、第5層上面に存在する。

D、E地区からは2層の遺物包含層が検出され、遺構は下層の遺物包含層の下より検出された。

基本的に観察される層位は、第1層表土（耕作土）、第2層淡黒褐色粘土（遺物包



第4図 針江北遺跡トレンチ配置図

含層)、第3層灰褐色砂質土、第4層暗茶褐色砂質土(遺物包含層)、第5層暗灰褐色砂礫層(地山)で、各層の厚さは、第1層約30cm、第2層約30cm、第3層約30cm、第4層約15cmである。遺構は第5層を切り込んでいる。

3. 遺構

SB-1 トレンチ北端に位置する桁行2間(柱間2.4m~3.0m)以上×梁行1間(柱間1.4m)以上、総規模5.3m以上×1.4m以上で、N-10°Wの南北棟の掘立柱建物である。柱掘方は径約30cm前後、深さ125cm~17.3cmの円形である。

SB-2 SB-1の東側に位置する桁行2間(柱間2.2m~2.6m)以上×梁行1間(柱間2.6m)以上、総規模5.0m以上~4.8m以上で、N-9°Wの南北棟の掘立柱建物である。柱掘方は径約30cm~45cm、深さ8.6cm~19.6cmの円形である。

SB-3 SB-2の東側に位置し、SB-2と切り合う。桁行2間(柱間約2.0m)以上×梁行2間(柱間1.2m~1.5m)以上、総規模4.2m以上×3.9m以上で、N-32°3'Wの掘立柱建物である。柱掘方は径約20cm~35cm、深さ約9.9cm~12cmの円形である。

SB-4 SB-3の西側に位置し、SK-17に切られる。総規模6.1m×50.5mの隅丸方形で、深さ約2.9cm~6.8cmを測る竪穴式住居である。

SB-5 SB-4の西側に位置し、北半分をSB-4に切られる。総規模4.8m以上×3.2m以上の隅丸方形で深さ14cm~16.3cmを測る竪穴式住居である。

SB-6 トレンチ北側の排水溝に切られて検出部分は少ない。総規模1.9m以上×0.7m以上の隅丸方形で、深さ約3.8cm~5.8cmを測る竪穴式住居である。

SB-7 SB-4の南東に位置し、東端部をSB-9に切られる。総規模7.2m×5.6mの隅丸方形で、深さ約12.9cm~16.3cmを測る竪穴式住居である。

SB-8 SB-7の北西側に位置し、SB-7に切られる。総規模7.8m×7.4mの円形に近い隅丸方形で、4個検出された柱穴のうち3個に柱根が遺存する。

SB-9 SB-7の東側に位置し、SB-7、SK-22を切る。総規模5.8m×5.7mの隅丸方形で、深さ約10.1cm~14.1cmを測る竪穴式住居である。

SB-10 SB-9の東側に位置し、北西端部をSB-9に切られ、東半分を排水溝に切られるため全容は不明である。総規模6.2m以上×2.7m以上の円形で、深さ約

118cm～145cmを測る竪穴式住居である。

SB-11 SB-10の南側に位置し、SK-10の南側に位置し、SK-35、SK-37に切られる。桁行1間（柱間1.7m）以上×梁行1間（柱間2.0m）、総規模3.2m以上×2.0mで、N-75°-Wの掘立柱建物である。柱掘方は径約23cm～40cm、深さ約6.4cm～18cmの円形である。

SB-12 SB-11の西側に位置し、SK-37を切る。総規模5.3m×5.25mの隅丸方形で深さ約11.2cm～15.8cmを測る竪穴式住居である。

SB-13 SB-12の西側に位置し、SB-12に大部分を切られる。総規模は5.8m×5.0mを想定できる五角形に近い形状を持ち、深さ約20cm～29.5cmを測る竪穴式住居である。

SB-14 トレチ北西端に位置する桁行5間（柱間1.0m～1.5m）×梁行2間（柱間1.0m～1.5m）以上、総規模6.4m×2.8m以上で、N-30°-Wの掘立柱建物である。柱掘方は径約25cm～40cm、深さ約11.1cm～21.6cmの円形である。

SB-15 SB-14の南東側に位置する桁行2間（柱間約1.7m）×梁行1間（柱間3.0m）、総規模3.4m×3.0mで、N-40°-Wの掘立柱建物である。柱掘方は径約28cm～40cm、深さ約12.2cm～25.6cmの円形である。

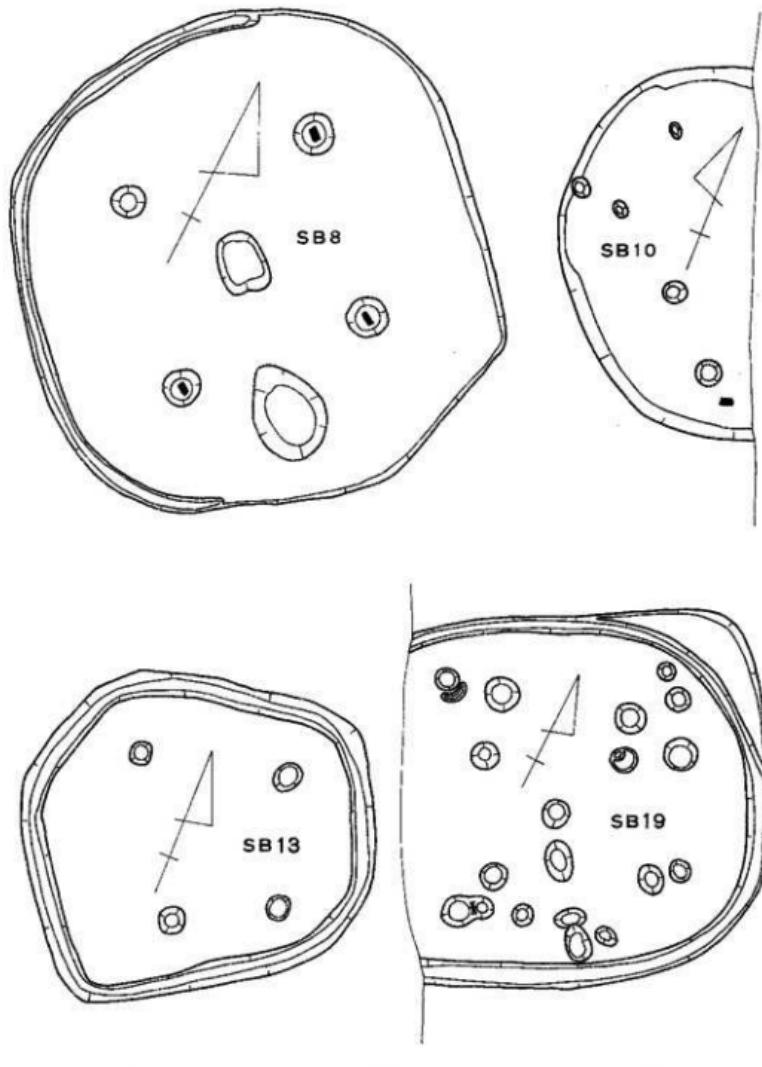
SB-16 SB-15の南側に位置し、SB-17に切られる。総規模245m以上×1.9m以上の隅丸方形、もしくは円形の形状を呈する。深さ約10cm～13.9cmを測る竪穴式住居である。

SB-17 SB-16の南東側に位置し、SB-18に切られる。残存部は6.0m×3.8m以上で、総規模は6.6m×405m以上を想定できる隅丸方形で、深さ約9.2cm～12.5cmを測る竪穴式住居である。

SB-18 SB-17の南東側に位置し、SB-19に切られる。総規模4.9m以上×3.85m以上の隅丸方形で、深さ約2.3cm～4.1cmを測る竪穴式住居である。

SB-19 SB-18の南東側に位置する。総規模5.9m×5.8mの隅丸方形で、深さ約11.1cm～20.7cmを測る竪穴式住居である。

SB-20 SB-12の南東側に位置する。総規模4.35m×3.8mの隅丸方形で、深さ約19.1cm～23cmを測る竪穴式住居である。柱穴は中央から1個検出されたほかは検出されなかった。また、住居址の周囲をめぐる小柱穴が7個検出されている。



第5図 遺構平面図 SB8・SB10・SB13・SB19

SB-21 SB-5の南東側に位置する桁行3間（柱間1.2m～1.3m）×梁行1間（柱間235m）、総規模384m×235mで、N-59°7'‐Eの掘立柱建物である。柱掘方は径約35cm～45cm、深さ約9.8cm～17.9cmの円形である。

SB-22 SB-21の南東側に位置する桁行2間（柱間約1.9m）×梁行2間（柱間1.4m～1.6m）、総規模3.9m×3.02mで、N-55°7'‐Eの掘立柱建物である。柱掘方は径約35cm～40cm、深さ7.5cm～15.5cmの円形である。

SK-1～7 C地区上層より7基の土坑が検出された。いずれも径50cm前後の円形で、深さは約20cm～30cmを測る。

SK-8 SB-2の内部に位置する。SB-2との新旧関係は整理途中であるため不明である。最大径0.62m×最小径1.2mの楕円形で、深さは約6.5cmを測る。

SK-9 SB-1の内部に位置する。SB-1との新旧関係は整理途中であるため不明である。最大径0.5m以上×最小径0.1m以上を測る。深さは約4.9cmを測る。

SK-10 SB-4の北西側に位置する。最大径127m以上×最小径0.7m以上の楕円形で、深さは約9.4cmを測る。

SK-11 SB-4の西側に位置する。最大径0.8m以上×最小径1.05mの楕円形で、深さは約3.6cmを測る。

SK-12 SB-4の西側に位置する。最大径0.55m以上×最小径0.8m以上の楕円形で、深さは約10cmを測る。

SK-13 SB-5の西側に位置する。最大径1.18m×最小径0.4m以上で、深さは約7.2cmを測る。

SK-14 SB-5の南側に位置する。直徑約1.2mの円形で、深さは約9.7cmを測る。

SK-15 SB-4の南西隅を切る。1.0m以上×0.9mの隅丸方形で、深さは約7.0cm～10.7cmを測る。

SK-16 SB-8の西側に位置する。最大径0.85m×最小径0.5mの楕円形で、深さは約1.9cm～9.0cmを測る。南半分を深く掘り込む。

SK-17 SB-4を切る。1.35m×0.7mの隅丸方形で、深さは約17.5cmを測る。

SK-18 SB-4の内部に位置するが、SB-4との新旧関係は整理途中であるため不明である。最大径1.2m×最小径1.0mの楕円形で、深さは約14.2cmを測る。

SK-19 SB-3の内部に位置するが、SB-3との新旧関係は整理途中である

ため不明である。最大径 0.87 m × 最小径 0.8 m の梢円形で、深さは約 6.9 cm を測る。

SK-20 SB-7 の東側に位置する。2.4 m × 最大 1.5 m、最小 0.8 m のくびれた隅丸方形で、深さは約 5.7 cm ~ 9.0 cm を測る。東に向ってやや深く掘り込む。

SK-21 SB-7 の内部に位置するが、SB-7 との新旧関係は整理途中であるため不明である。最大径 1.1 m × 最小径 0.85 m の梢円形で、深さは約 10 cm を測る。

SK-22 SB-7 の内部に位置し、SB-9 に切られる。SB-7 との新旧関係は整理途中であるため不明である。最大径 1.8 m × 最小径 1.6 m のややくびれた梢円形で、深さは約 7.3 cm を測る。

SK-23 SB-9 の南側に位置する。3.25 m × 0.87 m の隅丸方形で、深さは約 10.5 cm を測る。北西側はやや浅く、西側に落ち込みがみられ、深さは約 35 cm を測る。

SK-24 SB-13 の西側に位置し、SK-26 に切られる。2.2 m × 1.2 m 以上の隅丸方形で、深さは約 11.5 cm を測る。北側に溝状の落ち込みが、西側中央部にも落ち込みがみられる。深さは約 21.9 cm を測る。

SK-25 SB-13 の南西側に位置し、SK-24、26 に切られる。最大径 1.7 m 以上 × 最小径 1.25 m 以上の梢円形で、深さは約 30.6 cm を測る。

SK-26 SB-13 の西側に位置する。3.95 m × 1.95 m の隅丸方形で、深さは約 9.6 cm ~ 14.5 cm を測る。南側と中央部に落ち込みがみられ、深さは約 24 cm と約 28.3 cm を測る。

SK-27 SK-26 の南側に位置する。2.2 m × 1.1 m の隅丸方形で、深さは約 13.4 cm を測る。

SK-28 SK-26 の西側に位置する。2.75 m × 2.5 m の隅丸方形もしくは円形で、深さは約 11.8 cm ~ 16.4 cm を測る。

SK-29 SK-27 の南側に位置する。最大径 3.2 m × 最小径 1.4 m の梢円形で、深さは約 8.5 cm ~ 10.2 cm を測る。東側に落ち込みがみられ、深さは 16.8 cm を測る。

SK-30 SB-13 の南東側に位置する。1.8 m × 1.2 m の隅丸方形で、深さは約 5.4 cm ~ 7.3 cm を測る。

SK-31 SK-30 の南側に位置し、SK-30、32 に切られる。4.1 m 以上 × 3.25 m の隅丸方形で、深さは約 15.3 cm ~ 22.5 cm を測る。

SK-32 SK-31 の南側に位置する。最大径 3.6 m × 最小径 1.65 m の梢円形で、深さは約 21.6 ~ 23.4 cm を測る。

SK-33 SB-17の内部に位置し、SB-18に切られる。SB-17との新旧関係は整理途中であるため不明である。2.8m×1.8mの隅丸三角形で、深さは約13.5cmを測る。

SK-34 SB-10の南側に位置する。最大径2.05m×最小径0.8mの楕円形で、深さは約11.5cm～19.5cmを測る。

SK-35 SK-34の南側に位置する。0.9m×0.5mの「く」の字状を呈する。深さは約10cmを測る。

SK-36 SB-11の内部に位置するが、SB-11との新旧関係は整理途中であるため不明である。最大径1.7m×最小径1.15mの楕円形で、深さは約7.6cm～13.7cmを測る。

SK-37 SB-12に切られ、SB-11と切り合う。最大径1.85m×最小径1.0m以上の隅丸方形、もしくは円形で、深さは約6cm～9cmを測る。

SK-38 SB-11の東南側に位置する。最大径1.0m以上×最小径1.0mの楕円形で、深さは約5cmを測る。

SK-39 SB-20の東南側に位置する。最大径1.2m×最小径1.1mの楕円形で、深さは約5.1cm～9.1cmを測る。

SK-40 SB-20の南側に位置する。1.7m×1.3mの隅丸方形で、深さは約15.6cm～17.8cmを測る。

SK-41 SB-20の南側に位置する。直径約1.3mの円形で、深さは約9.8cm～12.5cmを測る。

SK-42 SB-20の西側に位置する。最大径1.8m×最小径1.0mの楕円形で、深さは約17.1cm～20cmを測る。

SK-43 SB-19の東側に位置する。2.25m×1.1mの隅丸方形で、深さは約18.2cm～19.5cmを測る。

SK-44 SB-19の東側に位置する。2.85m×1.2mの隅丸方形で、深さは約9.5cm～23cmを測る。北側に向って深く掘り込む。

SK-45 SB-21の東側に位置する。最大径3.45m×最小径1.0mの楕円形で、深さは約10.6cm～13.6cmを測る。

SK-46 SB-21の東側に位置する。1.0m×1.0mの隅丸方形で、深さは約4.9cmを測る。南側に落ち込みがみられ、深さは約11.2cmを測る。

SK-47 SB-22の東側に位置する。0.75m×0.75mの隅丸方形で、深さは約7.3cmを測る。

SK-48 SB-22の東側に位置する。1.8m×1.2mの隅丸方形で、深さは約15.5cm～27.5cmを測る。

SD-1 C地区下層の溝で、長さ28m以上、幅1m～3mを測る。深さは約30cm～40cmを測る。両岸を杭矢板及び横板で護岸する。中央付近で、SD-2と合流する。また、SD-1の西側には沼地状遺構が広がる。弥生時代中期の遺物が出土している。

SD-2 SD-1と合流する杭で護岸された溝の一部である。

SD-3 E地区。長さ1.7m以上×幅0.6m～0.7mで、深さは約10cmを測る溝の一部である。

SD-4 E地区。長さ2.6m以上×幅0.6mで深さ約10cmを測る。「く」の字状に屈曲する溝の一部である。

SD-5 E地区。SB-19の南側にあり、長さ6.0m×幅1.0m～1.3mで、深さ約10cmを測る溝の一部である。

SD-6 E地区。長さ18m以上×幅18mで、深さ約80cmを測る大溝である。多数の木製品及び土器が出土している。

SA-1 SD-6の北岸に沿って延びる柵状の遺構である。

SX-1 SB-12の西側にある弧状の落ち込みで、深さ約15cmを測る。円形住居址の一部の可能性もあるが、全容を明らかにすることはできなかった。

SX-2 SB-20の西側に位置する方形の落ち込みで、住居址の一部の可能性もあるが、全容を明らかにすることはできなかった。

4. 遺 物

木製品

SD-6より大量の木製品、加工痕のある木材が出土している。いずれも中層の暗茶褐色粘質土からの出土で、其伴上器の年代から古墳時代初頭のものと考えられる。

①は、一方の端部がバチ状に広がる棒状の木製品である。全長は、46cm、バチ状の端部の最大幅8.2cm、厚さ1.5～2cmを測る。棒状部は断面梢円形を呈す。針葉樹。これと同種と思われる木製品が他に3点程出土している。

②は、納穴状の抉りを持つ板状の木製品である。両端部が欠失しているため、その形状は定かではない。長さ49cm以上、最大幅11.5cm、最小幅4.8cm、厚さ1.7cmを測る。抉りは、長さ11cm以上、幅4.5cmを測る。他に同種の木製品が、一点出土している。針葉樹。

③は、椎状の木製品である。身部の太さは、ほぼ均一であるが、握りの部分の端部はやや太くつくりれている。全長21.5cmを測る。身部は、幅5cm、厚さ3.5cmの断面梢円形を呈す。握り部は、中央部で径2.5cmの断面円形を、端部で径3.5cmの断面円形を呈す。身部には、使用時についたと思われる凹みが見られる。針葉樹。

④は、山形の刻みを持つ板状の木製品である。下部は弧状を呈し、上部には2ヶ所のV字形の刻みを持つ。長さ39.5cm、最大幅9cm、厚さ0.8cmを測る。鳥形かと思われる。針葉樹。

⑤は、板材の両側から刻みを入れ、頭部を広く残したもので、中程に3.2cm×1.5cmの納穴が穿たれている。全長29.5cm、頭部の最大幅10.5cm、中央付近の幅3.7cm、厚さ1.8cmを測る。針葉樹。

⑥は、鋸歯状にV字型の刻みを4箇所入れた板材であるが、凸部が2箇所欠失している。また、2箇所に径1.2cm程の円孔を穿つ。全長40.5cm、最大幅8cm、厚さ1.5cmを測る。エブリに近い形状を持つと考えられる。針葉樹。

⑦は、ナスビ形鎌である。身部の先端の一部および柄部が欠失している。残全長52.5cm以上、身部の先端付近の幅は、10.5cm、ヘタの下側の幅7.2cm、柄の幅約4.5cm、厚さ0.8cmを測る。身部の先端部を削って先を薄く加工する他、各辺には、ていねいな面取加工が施されている。身部の片面には、長さ21cm、幅0.8cm、深さ0.2cmの細い溝が切り込まれている他、全体にチョウナ状の工具による整形痕が明瞭に残っている。先端部が欠失しているため詳細は不明であるが、先金具の挿着痕は観察できない。また、柄の上部も欠失しているため、この鎌が別材を着柄するものか、一枚板により全体をつくり出したものは不明であるが、ヘタの部分および、柄の残存部からは、紐ずれの跡等は観察できなかった。広葉樹。

⑧は、堅杵である。棒材の中央を細く加工したもので全長104cm、最大径8.2cm、最小径3.7cmを測る。一方の先端は、使用によるすれのため丸みをおびている。一部に焼けこげの跡がみられる。広葉樹。

SD-1からも多量の加工木が出土しているが、大半はSD-1の護岸に用いられた杭と矢板である。ここでは、杭、矢板以外の加工木、木製品の一部を報告する。なお、これらの年代は、共伴土器の年代から、弥生時代中期と考えられる。

⑨は、平面形が長方形を呈する槽である。縦半面と端面の一部が欠失する。長さ95.5cm以上、横幅18.5cm以上を測る。内底面は長さ63cm、横幅13cm以上、深さ約9.7cmを測る。厚さは、端面上部で2cm、側面上部で1.2cm、底部で0.7～1.2cmを測る。針葉樹の柾目材を用いる。

⑩は、有柄のスコップ状の木製品である。身部の先端および側面の一部が欠失する。身部は底面が方形で、深さ約5.6cmを測る。柄の先端は、身部の底面に対し約1.5cm程上方に彎曲する。全長48.5cm以上、身部の横幅18.5cm以上、柄の長さ21cmを測る。また、身部内部の長さは、12.5cmを測り、厚さは2.0～2.6cmを測る。身部内面に焼けこげの跡が見られる。針葉樹の柾目材を用いる。

⑪は、板材の一部を削り取り、端部を広く残したもので、全長56cm以上、広部の幅13cm、狭部の幅9.5cm、厚さ約2.3cmを測る。針葉樹の板目材。

⑫は、板材で2箇所に弧状の凹みがある。全長37cm、最大幅6.2cm、最小幅3.2cm、厚さ1cmを測る。一部が焼けこげている。針葉樹の板目材。

土 器

針江北遺跡からは、弥生時代中期～古墳時代初頭にかけての土器が大量に出土している。今回の概報では、その一部を報告する。

E地区

壺 ①は、二重口縁を持つ壺で、体部上部に櫛状工具による沈線と刺突列点文を施す。口縁の内外面、体部施文部より下部をヘラミガキする。(SB-12)

②は、長頸壺の系譜を引くもので、口縁がやや外方に開く。外面は、ヘラミガキ、口縁部内面は、板状の工具で調整する。(SB-12)

③も長頸壺の系譜を引くもので、口縁はやや短い。口縁外面は、縦方向のハケ目と、斜方向のハケ目を交互に施し、体部には、ハケ目を弧状に施す等、ハケ目による装飾を意識している。(SD-6)

④は、ソロバン玉状の体部に、やや外方に開く口縁がつく。口縁上部には、3条の沈線がめぐる。外面は、ヘラミガキ。(SB-10)

⑥は、小型の無頸壺で、底部は、やや上げ底風につくる。外面は、ヘラミガキ。

(SB-10)

壺 ⑥は、卵形の体部に、内彎しながら外方に開く短い口縁がつく。外面は、ハケ目以後ナデで調整する。内面には、ハケ目その他に細いヘラ状の工具で、かき上げたような跡が認められる。全体にきわめて雑なつくりで、口縁および体部の形状は一定しない。(SB-12)

⑦は、球形に近い体部から外反する短い口縁をもつもので、体部外面をハケ目調整、内面をヘラケズリで調整する。(SD-6)

⑧は、受口状の口縁を持つもので、口縁外面屈曲部に刻文を施す。体部外面は、ハケ目調整、外面に炭化物が付着する。(SB-12)

⑨も受口状口縁を持つもので、口縁外面屈曲部に刻文、体部上部に櫛状工具による5条の沈線がめぐる。体部外面は、ハケ目調整、内面下部は、板状工具によるカキ上げ痕がみられる。(SB-8)

⑩も受口状口縁を持つもので、口縁端部を大きく外方につまみ出す。口縁外面屈曲部には刻文、体部上部には、粗いハケ目の上から櫛状工具による9条の沈線、その下方に刺突列点、又、さらにその下方に弧状文、および沈線を持つ。器厚はきわめて薄い。⑧、⑨に比して時代が降ると思われる。(SD-6)

⑪は、最大径を上位に持つ無頸の壺である。外面を板状工具で、ナデつけるように調整する。(SB-8)

鉢 ⑫は、底部は平底で、体部は、やや内彎気味に外上方に延びる。外面上部は、細かなハケ目調整を施す。(SK-40)

⑬は、有孔鉢である。体部はやや内彎気味に外上方に延びる。口縁は刻みを入れ、波状につくる。外面はナデ、内面はハケ目調整。(SB-12)

⑭は、小型で、エッグスタンド状の土器である。体部の内外面は、ハケ目調整を施し、脚は手づくねで成形する。口縁は一定していない。体部外面には、炭化物が付着している。(SB-13)

高杯 ⑮、この脚はゆるやかに下方に広がる据を持つ。三方スカシで、外面はヘラミガキ。据部の内面は、ハケ目調整、脚柱部内面には、シボリ痕が認められる。(SB-12)

⑩は、小型の高壺で、中央の脚柱部から小さく外方に開く裾部と直線的に外方に開く壺部を持つ。外面および壺部内面をハケ目調整する。(S B-12)

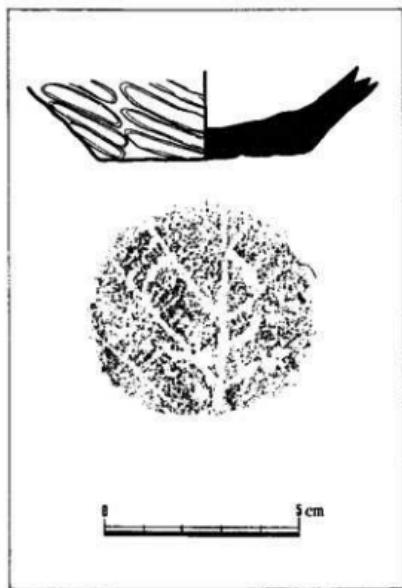
⑪は、きわめて小型の高壺の脚部である。外面および裾部外面をヘラミガキする。(S D-6)

器台 ⑫は、太い脚柱部と外反しながら外方にのびる受部を持つ。端部は、やや垂下させる。受部外面は、ハケ目調整の上から数条の縦方向のヘラミガキを施す。他は、ヘラミガキ。(S B-12)

D地区

D地区からは遺構が検出されず、土器の出土量もきわめて少なく、図示出来得るものは、ここにあげた一点のみである。

⑬は、大型の壺で口縁は体部より短く「く」の字状に外反する。口縁端面には、浅い凹線がめぐる。外面は、粗いハケ目調整。口縁内面は、横方向の粗いハケ目、体部内面は、やや細かなハケ目調整を施す。全体に磨滅している。



第6図 21実測図

C地区

C地区は、上下2層の遺構面が検出されている。

⑭は、上層の溝より出土したもので、脚付無頸壺である。円筒形の脚柱と大きく内彎する壺部を持つ。外面は、ていねいなヘラミガキ。壺部内面底部もヘラミガキする。

⑮は、壺もしくは壺の底部である。外面は、叩きで調整される。外底面には、葉脈痕が残る。⑯と同所よりの出土である。

下層のS D-1およびその西側に広がる沼状の遺構より比較的まとまった資料が出土している。

壺 ⑰は、卵型の体部に短く直立す

る口縁を持つ。口縁端部は内面を肥厚させる。内外面ともに粗いハケ目で調整する。

甕 ④は、受口状口縁を持つもので、体部上部には、粗いハケ目の上から櫛状工具によると思われるきわめて浅く細い沈線が多数めぐる。口縁外面には、斜方向の粗いハケ目を施し、口縁内面には、横方向の粗いハケ目を施す。器厚は、きわめて薄い。

⑤、⑥は、同一個体と思われる。球形に近い体部から口縁は「く」の字状に短く外反し、端部は内上方につまみ出す。体部外面は、粗いハケ目を内面には、やや細いハケ目を施す。底部は平底である。

⑦は、卵型の体部から「く」の字状に外方に屈曲する口縁を持つ。外面は、不規則な粗いハケ目で調整する。外面には、炭化物が厚く付着する。

⑧ 口縁は、ゆるやかに外方に屈曲した後、さらに端部を上方につまみ上げ、受口状口縁に近い形を持つ。体部上部には、櫛状工具による4～5条の沈線がめぐる。外面には、炭化物が厚く付着する。

⑨は、壺もしくは甕の底部で、内外面をハケ目で調整する。

高坏 ⑩は、半球状の坏部と水平に張りだした口縁を持つ。脚部の形状は不明であるが、内外面をハケ目で調整する。

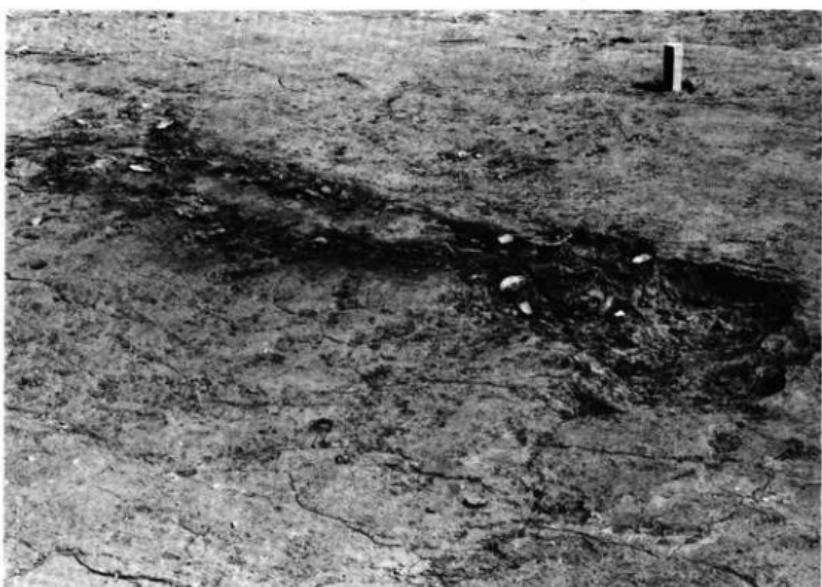
以上出土遺物の一部を略述した。当遺跡の出土遺物に関しては、本報告書の刊行を待ちたい。

5. 小 結

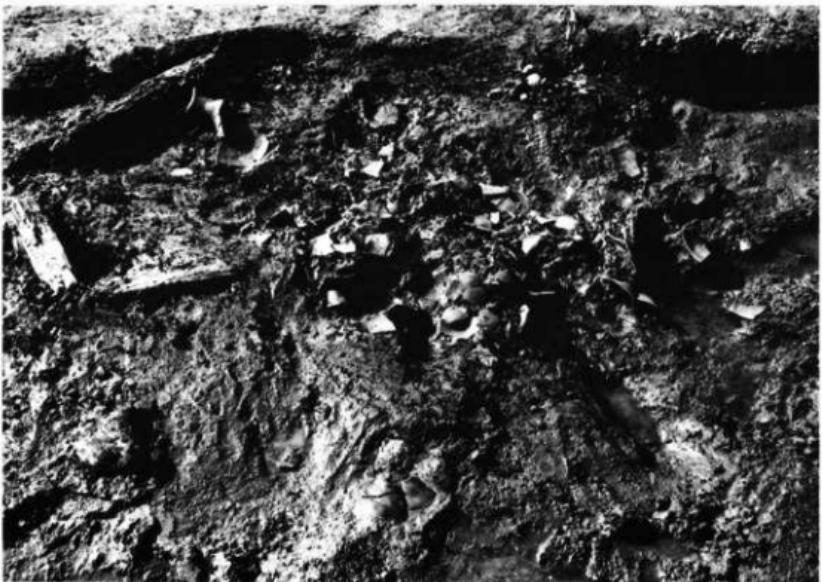
今回検出された遺構、遺物は、弥生時代中期と弥生時代後期～古墳時代初頭にかけてのものに分けられる。前者はC地区下層から検出されたもので、SD-1を中心とする。SD-1は護岸を施された溝で、水路的な役割をはたしていたものと考えられ、周辺には水田の存在が予想される。出土遺物は甕の占る割合が高い。後者はC地区上層より検出された溝および土坑群とE地区より検出された住居址群である。住居址はSD-6を境に北側からのみ検出されており、SD-6は住居空間と他の空間（生産域・蒸穀等）を区切る役割を持っていたものであろう。検出された遺構間にはそれほど大きな時期差はないと考えられる。また、朱彩が施された土器や、ミニチュアの土器が出土していることも注目される。

当初低湿地帯において住居跡の存在は予想されていなかったが、今回20棟以上の建

物跡が検出されたことから、弥生時代から古墳時代にかけての集落のありかたについて今後再考する必要があるかもしれない。今回の調査で検出された住居址はすべて弥生時代以前の氾濫の跡と思われる砂礫層上に立地している。このような遺構のありかたは新旭町霜降所在の正伝寺南遺跡においてもみられることである。水田化しやすい低湿地に居を構える場合、少しでも水はけがよく、かつ地盤の固い砂礫層面を選んで住居を設定したものであろう。遺構・遺物の詳細については正報告の刊行を待ちたい。



第9区 SK29 (北より)



第10区 SD47 土器集中箇所 (南より)



第11・12区 全景（西より）



第11区 SB10（西より）



第11区 上坑群（南より）



第11区 SK32・33（西より）



第11・12区 SB11(南より)



第12区 SB12~15(西より)

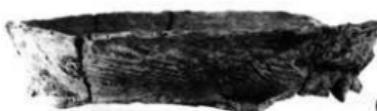


第12区 SB16~18(南より)



第12区 SK45(東より)

圖版六 正伝寺南遺跡・遺物





9



10



11



12



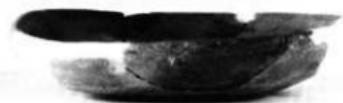
13



16



14



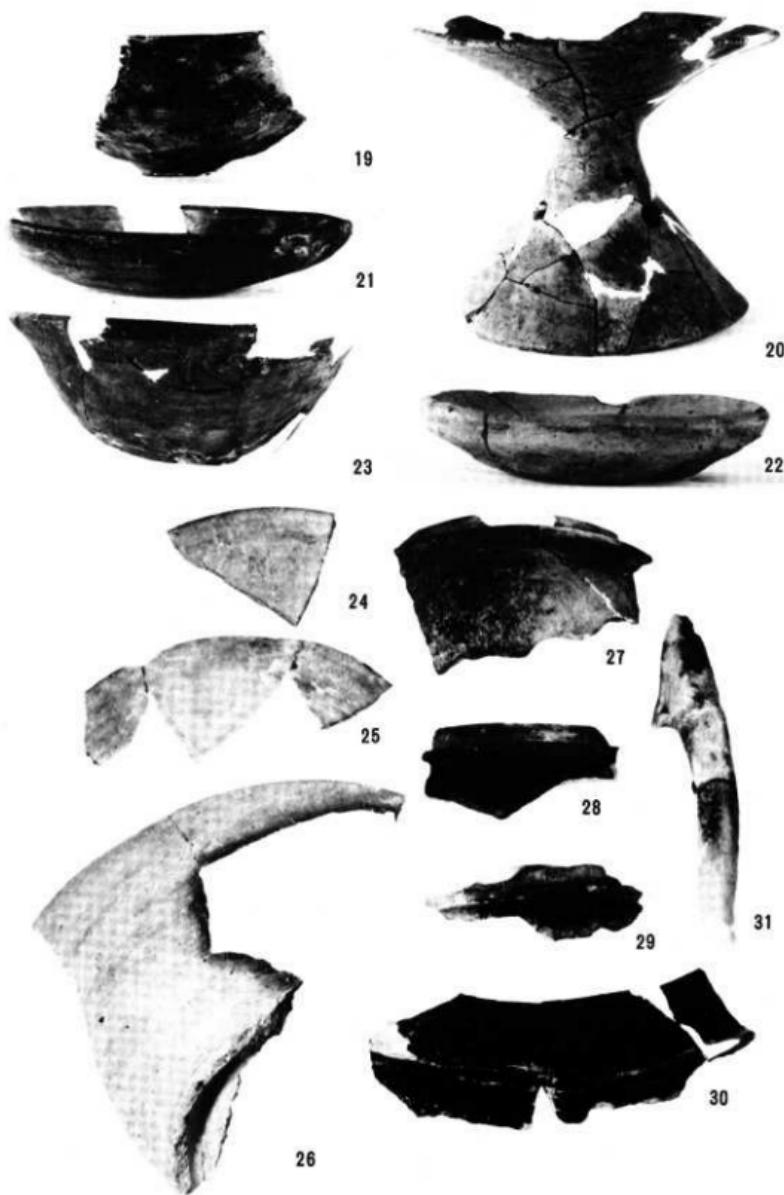
17



15



18





B地区・b区 全景（北より）



b区 土器出土状況

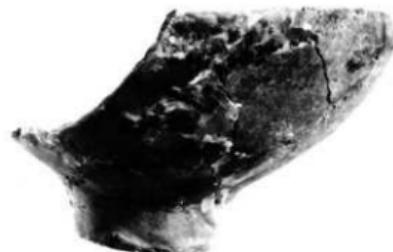


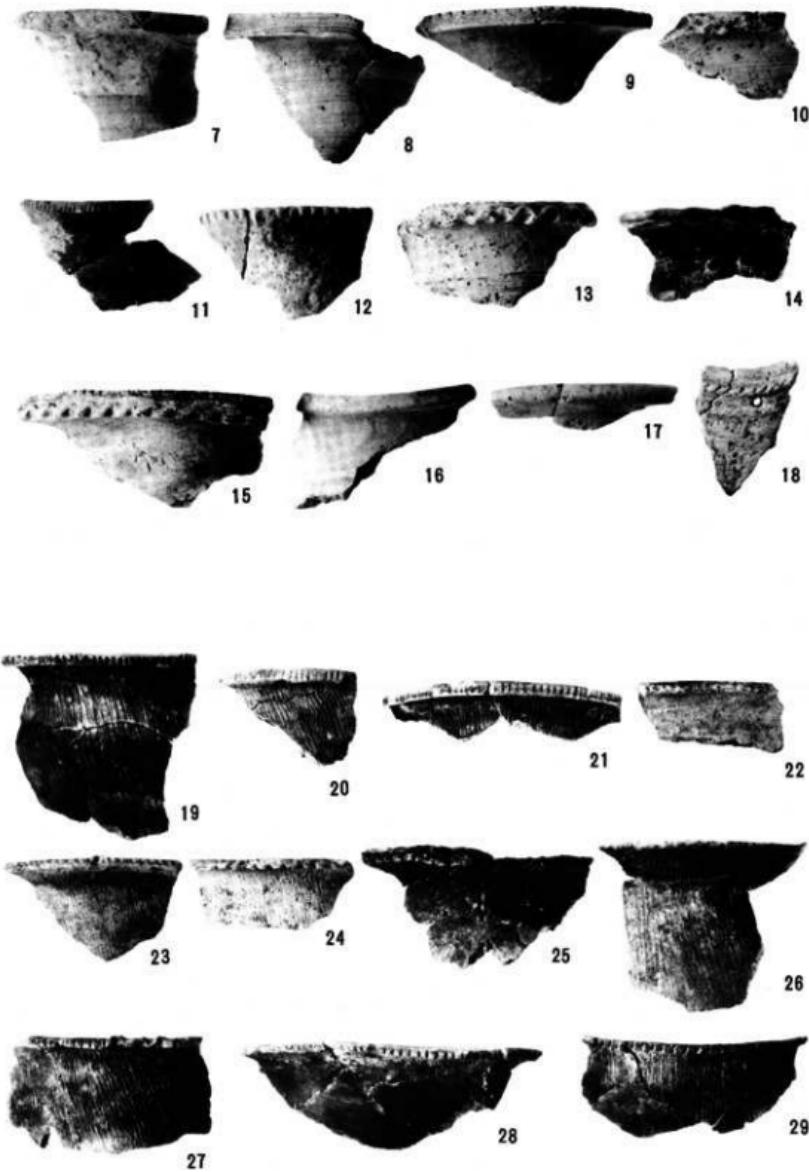
B地区・C区 全景（南より）



C区 土器出土状況

圖版十一
針江南遺跡・遺物







30



31



1



2



3



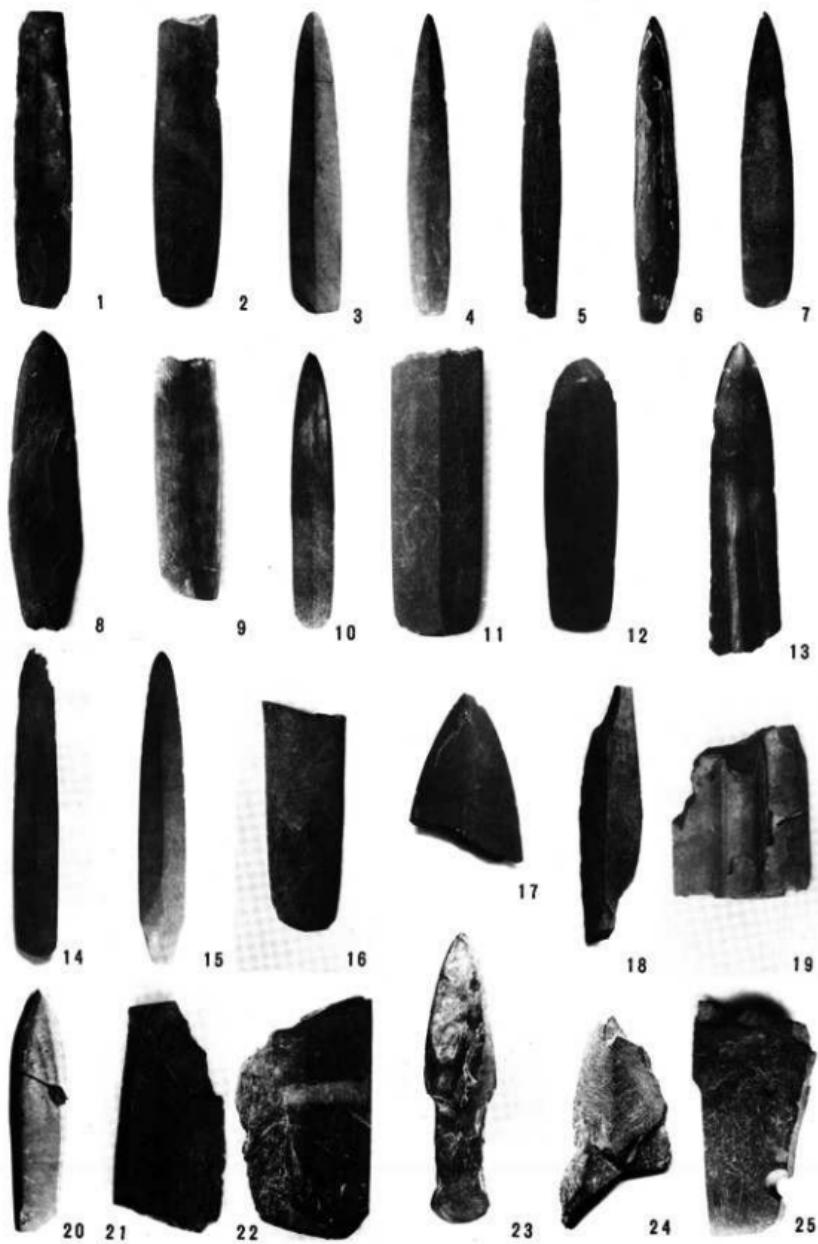
4



32

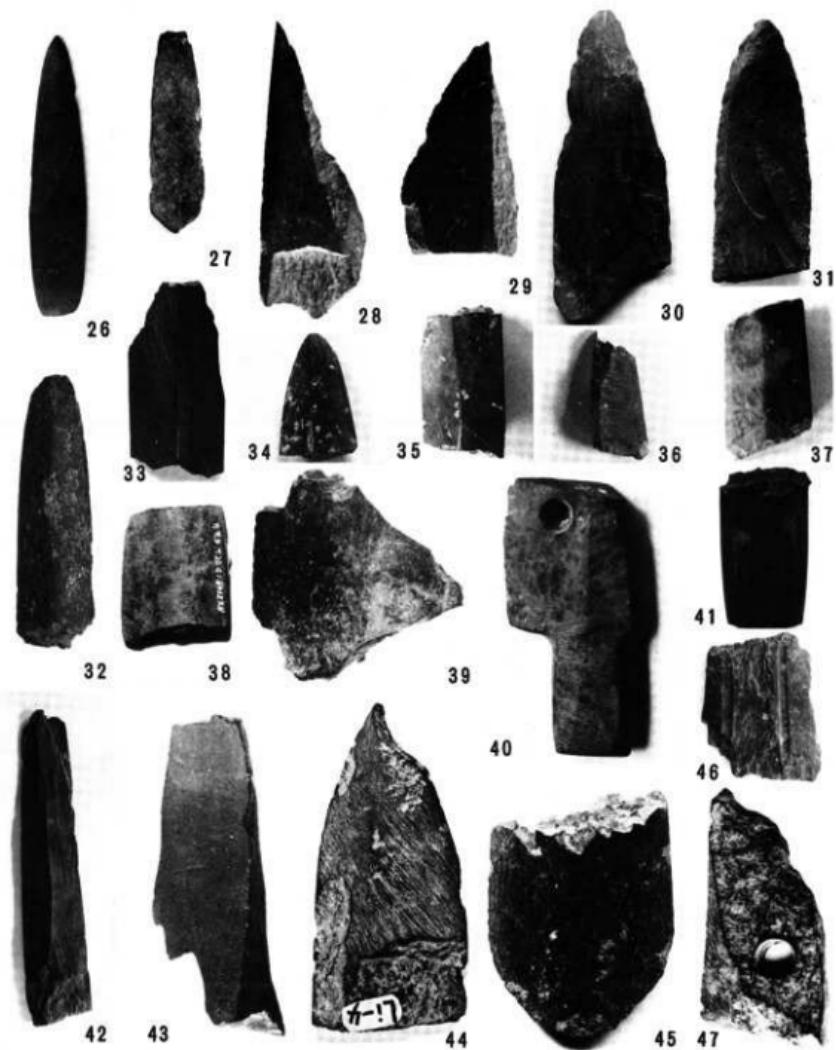
5

図版十五 県下出土磨製石剣・石戈(1)



(スケール不同)

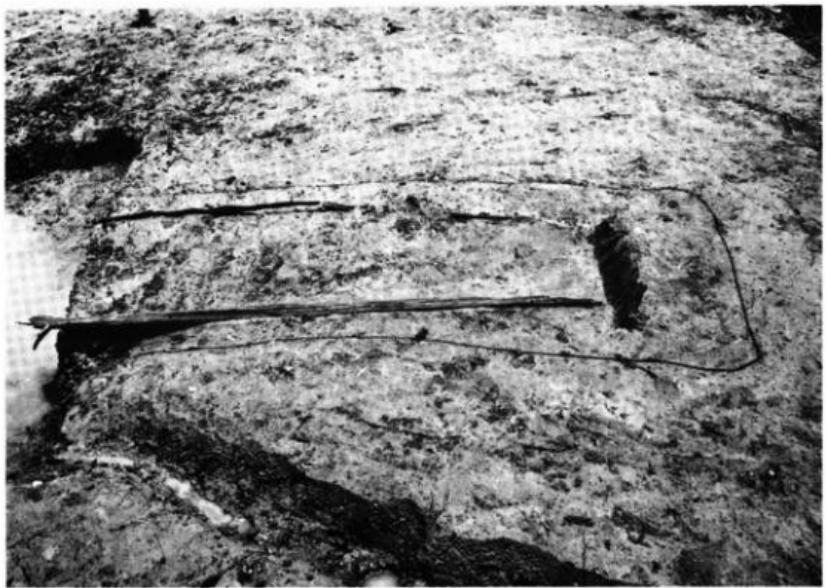
図版十六 県下出土磨製石劍・石戈(2)



(スケール不同)



C地区上層 遺構群（北より）



C地区上層 木棺墓（南より）



S D 1 (北西より)



S D 1 (西より)



S D 6 (北西より)



S D 6 ⑧出土状況

図版二十 針江北遺跡・遺構



E地区 全景（北より）



E地区 全景（南東より）



E地区 SB8~11 (南東より)



E地区 中央の土城群 (南より)



E地区 SB 20 (東より)



E地区 SB 8柱穴 (東より)

圖版二三
針江北遺跡・遺物



4



5



1



3



2



9

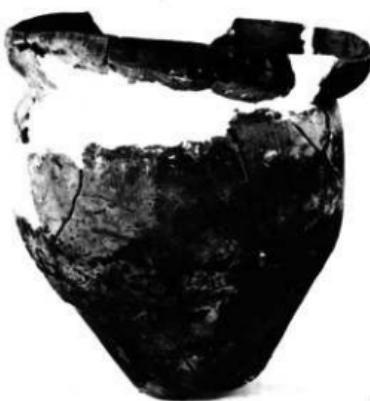


10

出土土器



11



6



8



14

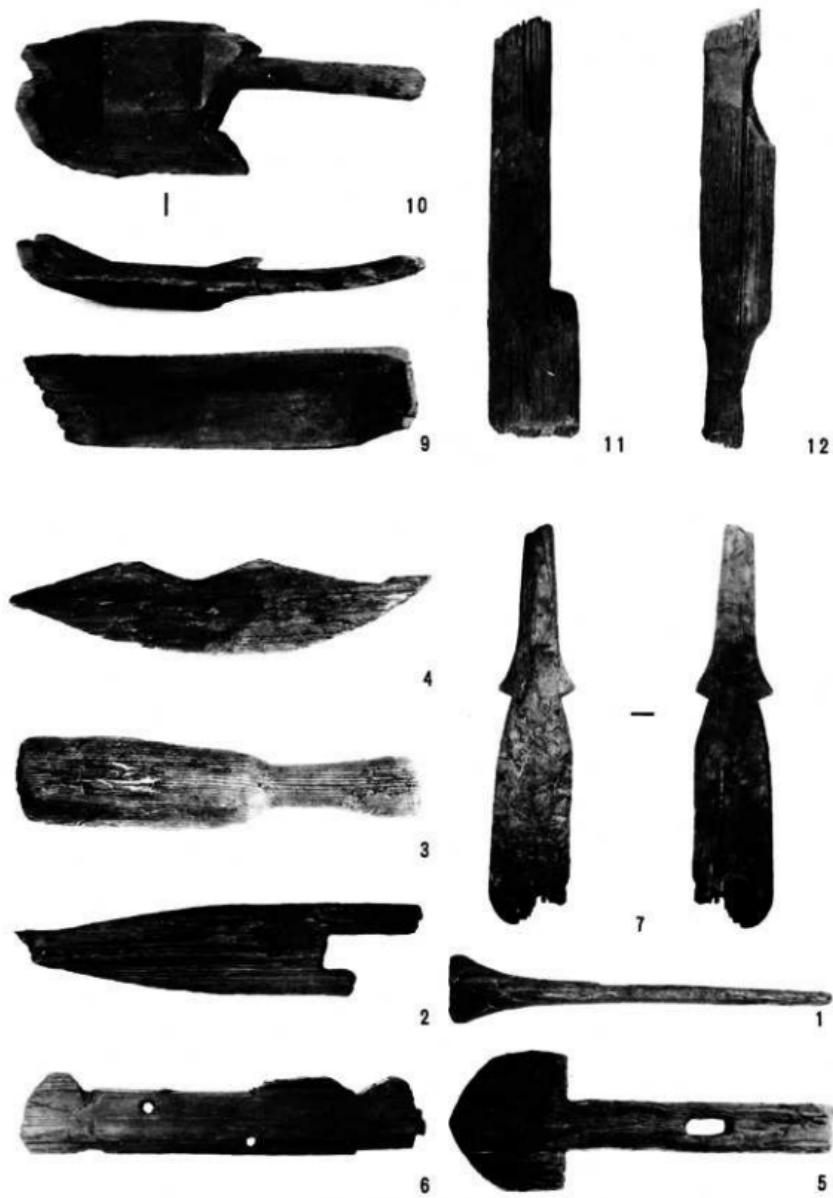


12



20





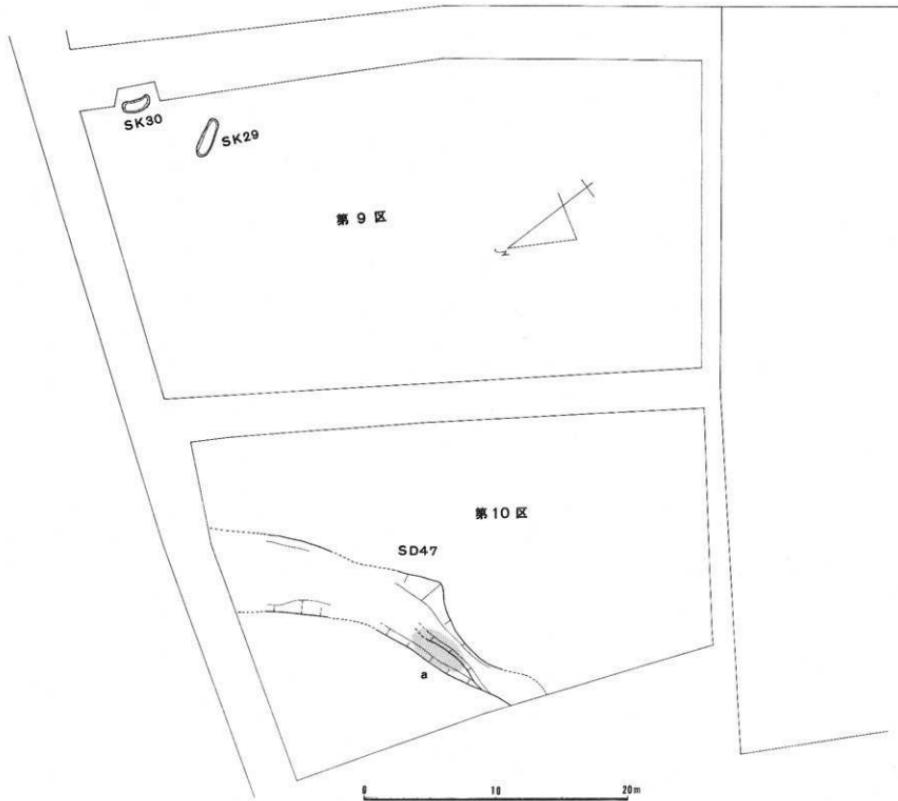
出土木器

図版二七 周辺遺跡分布図



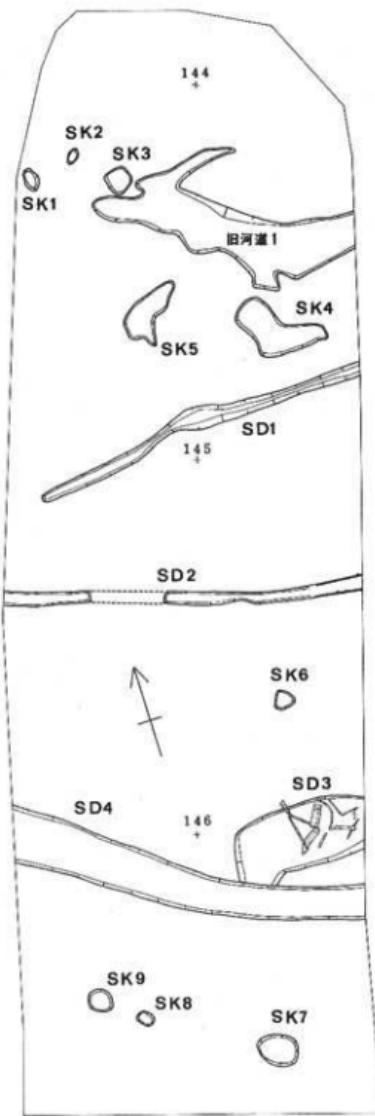
新旭町湖岸部における遺跡分布

図版二八 正伝寺南遺跡・造構平面図(1)



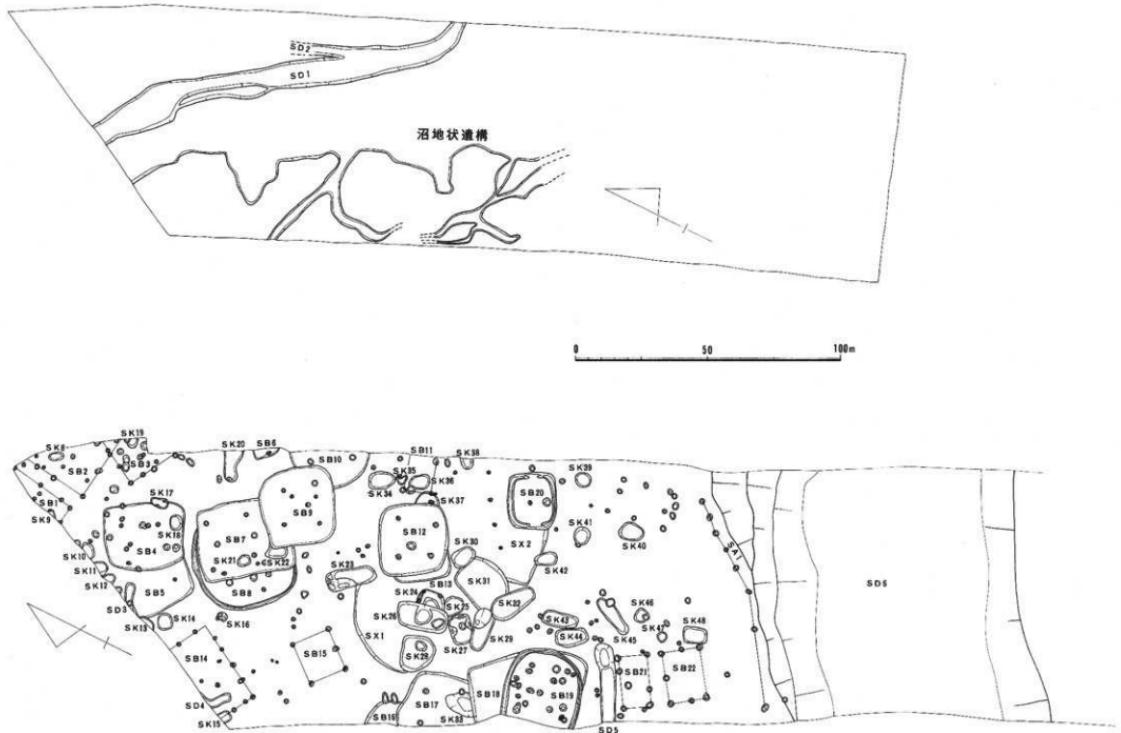


図版三十 针江南遺跡（B地区）・遺構平面図

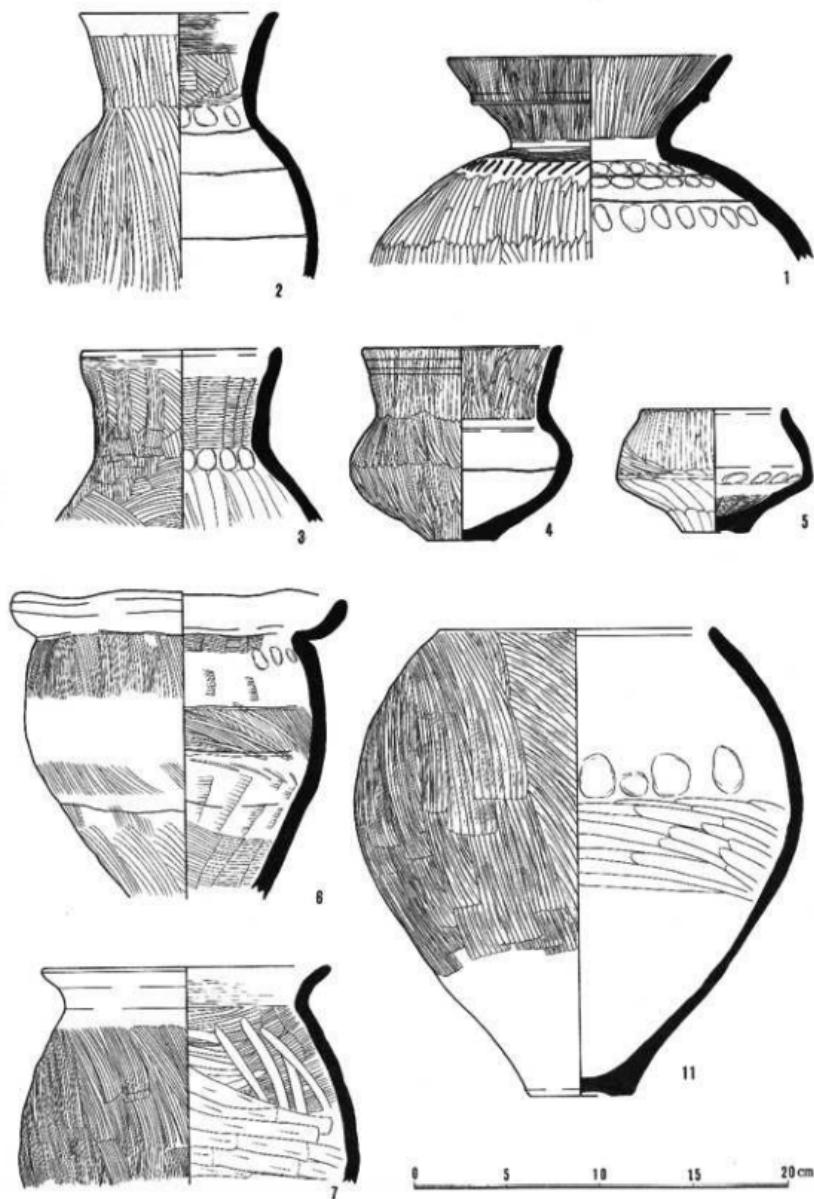


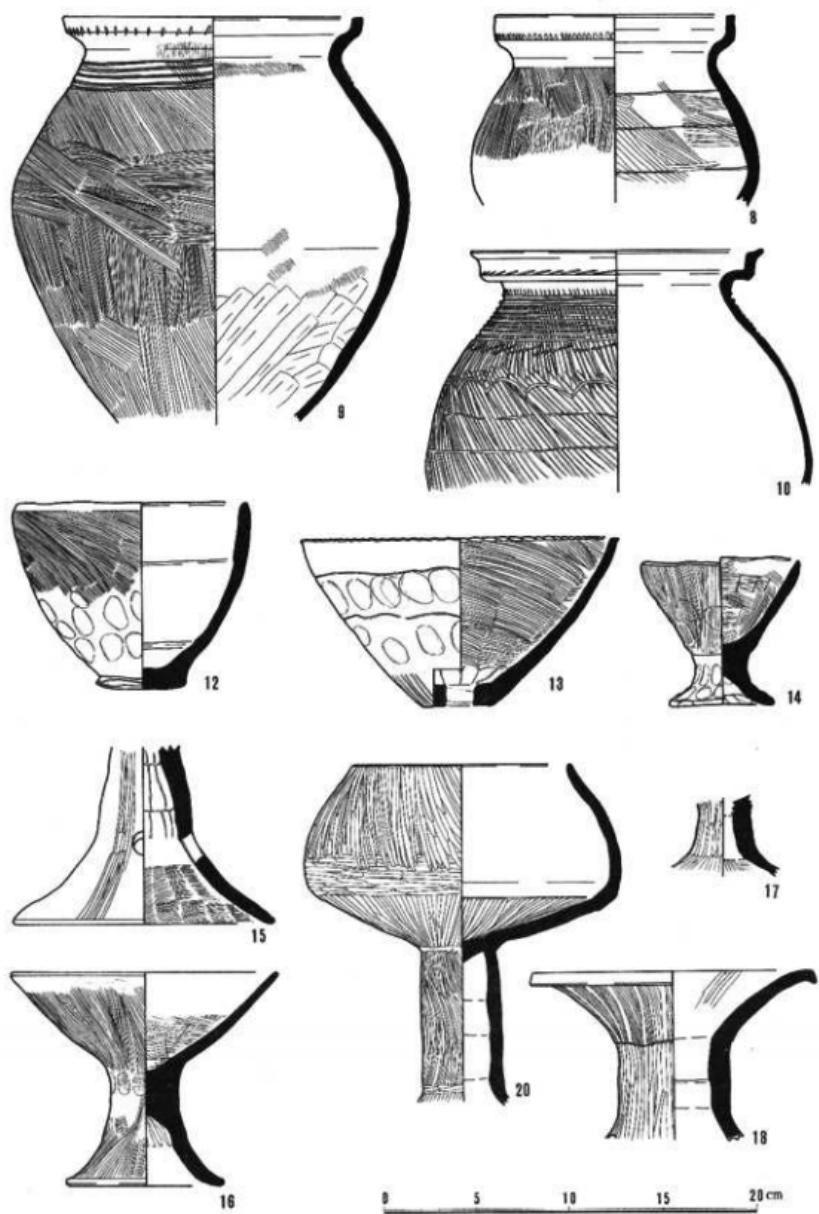
0 15m

図版三一
針江北遺跡・遺構平面図

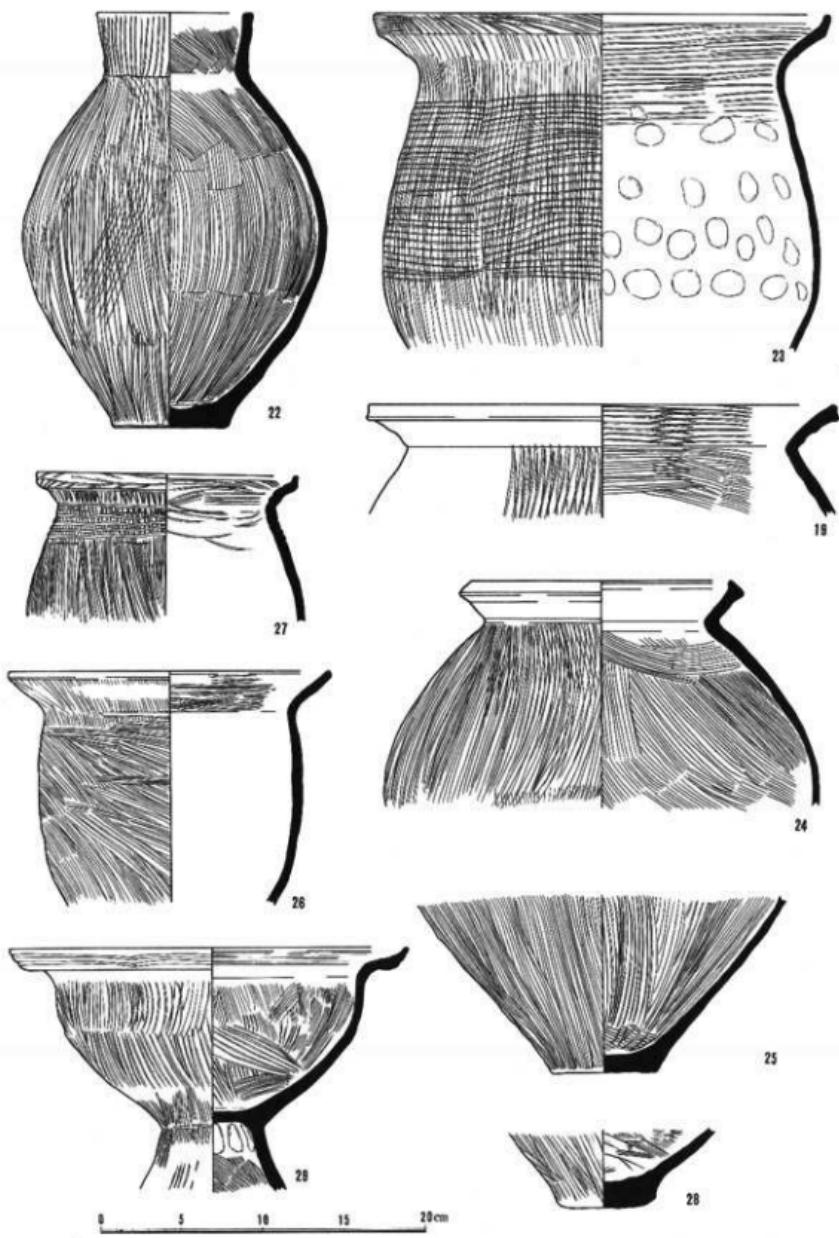


図版三二 針江北遺跡・遺物実測図(1)





圖版三四 鈎江北遺跡・遺物実測図(3)



調査参加者

本年度も地元、新旭町などから多数の方々に参加を頂き、多大なる御協力を賜った。記して感謝を申しあげたい。

— 新旭町（あいうえお順・敬称略） —

足立四郎、上原かづ子、桑原和枝、桑原きみ子、坂尾りつ、高田ユキ、
田中ヨノ、玉垣敬一、中西一馬、西川加津子、西村康子、八田正広、
福田とよ子、福田房吉、水田宗太郎、吉野清造、吉野半四郎、

— 東洋建設（敬称略） —

新井武俊、山本幸夫、舟越隆志、木下寿一、北橋栄治、豊村 昇、
篠内 弘、猪飼正和、中村重次。

国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和59年度）5

新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・ 針江北遺跡発掘調査概要

昭和60年3月

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会
財滋賀県文化財保護協会

印刷 富士出版印刷株式会社
